

『朱子語類』訓門人訳注（九）

— 卷一二〇・97条〜卷一二二・35条 —

『朱子語類』訓門人研究会

本稿は、『朱子語類』訓門人研究会の二〇一五年の成果である。

二〇〇七年に発足した本研究会も、今年で無事八年目を迎えた。その間、二〇一二年には卷一一三から卷一一六を、二〇一四年には卷一一七から卷一一八を、汲古書院より刊行することができた。現在、残りの卷一一九から卷一二二の一日も早い刊行を目指して、卷一一九は研究会とは別に垣内が個人で担当し、研究会では卷一二二を読み進めている。

なお、本稿の作成は、研究会の参加者が順番に訳注原稿を作成し、それを研究会で検討したあと修正を加え、さらに最終的に訳文の統一をはかるために垣内が加筆・修正をした。訳注原稿の担当者は、各箇所最後にその氏名を記した。（垣内景子）

今年度の研究会の参加者は以下の通りである。

- 垣内景子（明治大学文学部教授）・宮下和大（麗澤大学外国語学部助教）・阿部光磨（早稲田大学講師）
- ・松野敏之（國士舘大学文学部准教授）・中嶋諒（学習院大学史料館E・F共同研究員）・阿部亘（中国語言大学外籍教師）・原信太郎アレシヤンドレ（早稲田大学講師）・田村有見恵（早稲田大学大学院博士後期課程）
- ・佐々木仁美（明治大学付属明治高校中学教諭）・江波戸互（早稲田大学大学院博士後期課程）
- ・蔣建偉（早稲田大学大学院博士後期課程）・村田岳（早稲田大学大学院博士後期課程）・石山裕規（明治大学大学院博士前期課程）・戸丸凌太（國士舘大学文学部中国語・中国文学専攻）

凡例

※底本は、中華書局・理學叢書『朱子語類』を用いたが、標点等は適宜改めた部分もある。

※校注は以下の四本を参照し、各略称を用いた。

- ・『朝鮮古写 徽州本朱子語類』（中文出版社）……………楠本本
- ・『朝鮮整版 朱子語類』（中文出版社）……………朝鮮整版
- ・『朱子語類』（正中書局）……………正中書局本
- ・『朱子語類大全』（和刻本・中文出版社）……………和刻本

なお、煩瑣を避けるために次の字の異同については、一々注記しなかった。

「著」⇓「着」 「箇」⇓「个」 「辨」⇓「辯」 「它」⇓「他」 「于」⇓「於」

「邊」⇓「邊」⇓「辺」 「工夫」⇓「功夫」 「粗」⇓「麤」 「子細」⇓「仔細」
「總」⇓「摠」 「竊」⇓「窃」

また、以上の四本において底本とは異なる巻に収録されている場合、巻数と共にページ数を明示した。

※原文・訳文中の「 」は小字注部分である。

※注で用いた略称は以下の通り。

・『語類』：『朱子語類』 なお、『語類』からの引用は、巻数と条数のみを記した（括弧内の頁数は底本のもの）。

・『遺書』：『河南程氏遺書』（中華書局・理学叢書『二程集』）（括弧内の頁数は上記のもの。）

・『門人』：『朱子門人』（陳榮捷、台湾学生書局、一九八二年）

・「師事年攷」：「朱門弟子師事年攷」（田中謙二、『田中謙二著作集』第三卷所収、汲古書院、二〇〇一年）

・『門人考』：『朱熹書院与門人考』（方彦寿、華東師範大学出版社、二〇〇〇年）

・『資料索引』：『宋人伝記資料索引』（中華書局）

・『学案』：『宋元学案』（中華書局）

・『考文解義』：『朱子語類考文解義』（朝鮮・李宜哲、民族文化文庫）

卷二一〇 朱子十七 訓門人八

【二一〇・97】

用之（劉礪）が、先生が先日蔡（元定）氏に返答した書簡を取り上げ話題にした。

朱子の書簡「あなたのお手紙にある（周敦頤の）「礼を以て先と為す」についての説は、「造化を識る」云々の議論と同じく、偏った見方であって、我が身の修養に切実なものではありません。そもそも濂溪（周敦頤）の言葉は的確です。『通書』にいくつか「幾（兆し）」字が出て来ますが、まさにそのように（兆しを察するように）すばやく理解すれば、自然に余計な力が省け、節度がなさそうで節度があり、造化を云々する以前にすでに造化の作用が働いているのです。」

用之「これはどういう意味なのでしょうか。」

朱子「幾」はもちろん察知しなければならぬ。先ずは日常の場で我が身を省察し、善はそのまま保ち、悪は除いて行なわないようにすること、これが自分にとって切実なところなのだ。古人の礼儀は、いずれも古人が幼い時から理解しているものであって、今の人のお辞儀や挨拶と同じように自然に慣れ親しんだものだが、今となってはもう知りようがない。今の人がそれを理解しようとすれば、すぐにそれ自体が別の大問題となってしまう。それを、先ずは我が身に切実なところに取り組むべきだと言わずに、いきなり古人の礼儀の一連の沿革を理解しようとするならば、多くの精力をすっかり摩耗してしまい、結局自分自身に切実な

問題にはならない。」

朱子『大学』が教える「致知」「格物」こそが、まさに取り組むべきところであって、そうしていけば「意識」「心正」の段階へと展開していき、自然に大きなものになっていく。もし造化だの何だのを理解しようとして、先に自分の心を広げてしまえば、そのうち何事も満足に説明することができなくなる。」

〔葉賀孫〕

用之舉似（1）先生向日曾答蔡丈（校1）書（2）。「承諭以禮爲先之說（3）、又似識造化之云、不免倚於一物、未知（校2）親切工夫耳。大抵濂溪說得的當。通書中數數拈出幾字（4）、要當如此瞥地（5）、即自然有箇省力處、無規矩中却有規矩、未造化時已有造化。」「此意如何。」曰「幾固（校3）要得。且於日用處省察、善便存放這裏、惡便去而不爲、便是自家切己（校4）處。古人禮儀、都是自少理會了、只如今人低躬唱喏（6）、自然習慣。今既不可考、而今人去理會、合下便別將做一箇大頭項（7）。又不道且理會切身處、直是要理會古人（校5）因革（8）一副當（9）、將許多精神都枉耗了、元未切自家身己在。」又曰「只有大學教人致知格物（10）底、便是就這處理會。到意識心正（11）處展開去、自然大。若便要去理會甚造化、先將這心弄得大了、少間都沒物事說得滿。」

〔賀孫〕

（校1）正中書局本・楠本本は「丈」を「文」に作る。

（校2）正中書局本・朝鮮整版は「知」を「是」に作る。

- (校3) 正中書局本・朝鮮整版は「固」を「是」に、和刻本は「箇」に作る。
- (校4) 楠本は「切己」を「却」に作る。
- (校5) 正中書局本・朝鮮整版は「人」を「今」に作る。
- (1) 舉似 話題として先人の言などを提示すること。卷三三・88条(八五一頁)「先生再三舉似曰、這處極好看仁」、卷四四・26条(一一二頁)「舉似某人詩云云、何似仲尼道最良」。
- (2) 答蔡文書 『文集』卷四四「答蔡季通」第三書「所論以禮爲先之說、又似識造化之云、不免倚於一物、未是親切工夫耳。大抵濂溪先生說得的當、通書中數數拈出幾字、要當如此譬地、即自然有箇省力處、無規矩中却有規矩、未造化時已有造化。然後本隱之顯推見至隱、無處不吻合也」。
- (3) 以禮爲先之說 周敦頤『通書』礼学「禮理也。樂和也。陰陽理而後和、君君、臣臣、父父、子子、兄兄、弟弟、夫夫、婦婦、萬物各得其理、然後和。故禮先而樂後」。
- (4) 通書中數數拈出幾字 『通書』誠幾德「誠無爲、幾善惡」、同・聖「寂然不動者、誠也。感而遂通者、神也。動而未形、有無之間者、幾也。誠精故明。神應故妙。幾微故幽。誠神幾曰聖人」。
- (5) 譬地 ちらりと見る、すばやく察する。『語類』では本条だけに見える表現。
- (6) 唱喏 お辞儀をしながら声を出して挨拶をすること。
- (7) 頭項 項目、端緒。卷二〇・4条(四四七頁)「蓋爲學之事雖多有頭項、而爲學之道則只求放心而已」、卷二二四・29条(二九七四頁)「吾儒頭項多、思量著得人頭瘡」。
- (8) 因革 因襲と変革。ここでは古の礼儀の不変のところと変化したところ。

(9) 一副當 一連の、ひとそろいの。現代語の「一套」「一系列」に近い語気。卷十八・82条(四一〇頁)「天之生人物、箇箇有一副當恰好無過不及底道理降與你」、卷十六・106条(三三六頁)「外面一副當雖好、然裏面却踏空、永不足以爲善、永不濟事」。

(10) 大學教人致知格物 『大学』(章句經一章)「古之欲明明德於天下者、先治其國。欲治其國者、先齊其家。欲齊其家者、先脩其身。欲脩其身者、先正其心。欲正其心者、先誠其意。欲誠其意者、先致其知。致知在格物」。

(11) 意誠心正 『大学』(章句經一章)「物格而后知至、知至而后意誠、意誠而后心正、心正而后身脩、身脩而后家齊、家齊而后國治、國治而后天下平」。

【二一〇・98】

林仲參が、(孔子の所謂)「下学(身近なことを一つ一つ積み上げて学んでいくこと)」の要点と実践すべき点について質問した。

朱子「すぱっと机に向かって家の中で座っていること、これが自分のものとして実践するということだ。外の(目を引く)高山や曲水を慕っているようでは、自分のものとして実践していることにはならず、何ら得るところがない。」

そこで先生は、(蘇軾の)詩を挙げられた。「貧家^{きよ}淨く地を掃ひ、貧女^す好く頭を梳く。下士^す晩に道を聞き、

聊か拙を以て自ら修む（貧しい家でもきれいに掃除し、貧しい女でもきちんと髪を梳いていればそれなりに見えるように、遅まきながら学問の道に接した自分ではあるが、拙いながらも地道に自らを修めることに努めたい。）

朱子「先人はただこのように言うのみだ。」

〔董銖〕

林仲參問下學（1）之要受用（2）處。曰「灑底椅（校1）桌在屋下坐（3）、便是受用。若貪慕外面高山曲水、便不是受用底。」舉詩（4）云「貧家淨掃地、貧女好梳頭。下土晚聞道、聊以拙自修。」「前人只恁地說了。」〔銖〕

（校1）正中書局本・朝鮮整版は「椅」を「倚」に作る。

（1）下學 『論語』憲問「子曰、不怨天、不尤人。下學而上達。知我者其天乎。」

（2）受用 身に受けて実践する、自分のものにして役立てる、得るところがある。卷十四・4条（二四九頁）「先看大學、次語孟、次中庸。果然下工夫、句句字字、涵泳切己、看得透徹、一生受用不盡」、卷九・62条（一五七頁）「今只是要理會道理。若理會得一分、便有一分受用、理會得二分、便有二分受用」。

（3）灑底椅桌在屋下坐 文意未詳。『考文解義』は「灑、俗語未詳。謂廢撤床椅而坐於屋下。不作游山玩水之想、以喻反身守靜無外馳逐物之意」とするが、不自然か。訳文は、（校1）に示した「倚」の字

の可能性と、後文からの類推で意識した。

(4) 詩 蘇軾「貧家淨掃地」(『蘇東坡詩集』卷四二所収)「貧家淨掃地、貧女好梳頭。下士晚聞道、聊以拙自修。叩門有佳客、一飯相邀留。春炊勿草草、此客未易媮。慎勿用勞薪、感我如薰猶。德人抱衡石、銖黍安可度」。なお、朱熹は『文集』卷三二「答張敬夫」第二八書においても、「此前輩所謂下士晚聞道、聊以拙自修者、若充擴不已、補復前非、庶其有日」と、この詩を「前輩」のものとして引いている。

【一一〇・99】

劉淮が教えを乞うた。

朱子「私は特別なことをしているわけではない。ただ虚心に、穏やかに、聖賢の書物を読んでいるだけだ。先ずは、これは正しい、あれは正しくないというように読んでいくと、読み進めるたびに新しい発見がある。これが進歩だ。そうでなければ、(書物は自分の)外側のことに過ぎず、ひたすら外へ向けて頑張って、(書物の)内にある味わいを知らないようでは、何にもならないのも当然だ。」

劉淮求教。曰「某無別法、只是將聖賢之書虚心下氣以讀之。且看這箇是、那箇不是。待得一回推出一回新、便是進處。不然、只是外面事、只管做出去、不見裏(校一)滋味、如何責得他。」

(校1) 正中書局本・朝鮮整版は「裏」を「裏面」に作る。

【二〇・100】

趙恭父(師^{シキョウ}鄭)が再びお目通りした。

朱子「その後、読書の調子はどうかね。」

趙恭父「最近、自分の心持ちがあまり切実でないような気がしています。」

朱子「そのようにその場のぎに適当に学ぶだけでは、むしろいい加減という悪癖になってしまう。」

趙恭父「どうして敢ていい加減にすることなどありませんか。」

朱子「(心持ちが)切実でなければ、やがてそうなってしまうのだ。気をつけないといけない。」

先生がまた質問された。

朱子「自分自身に切実な問題はどうか努力しているのかね。」

趙恭父「私欲に打ち勝つ難しさが、いよいよわかってきました。」

朱子「それも、私欲をしきりに目の敵にしてはならない。少しでもこの心が何かによって引きずられていくということに気付いたら、すぐにそれを引き戻すだけのこと、それだけのことだ。」

趙恭父再見。問「別後讀書如何。」曰「近覺得意思却不甚迫切。」曰「若只恁地據見定(1)做工夫、却

又有苟且之病去。」曰「安敢苟且。」曰「既不迫切、便相將(2)向這邊來、又不可不察。」又問「切己工夫、如何。」(校1)「愈見得己私難勝。」曰「這箇也不須苦苦與他爲敵。但纔覺得此心隨這物事去、便與他喚回來、便都沒事。」

(校1) 正中書局本・朝鮮整版は、「愈」の前に「曰」が入る。

(1) 據見定 その時の状況に応じて適当に、おざなりに。卷二二一・21条(二九二五頁)「眼前朋友大率只是據見定了、更不求進步」、卷一〇一・71条(二五六七頁)「如龜山極是簡易、衣服也只據見定」、卷七・10条(一二五頁)「三十歲覺悟、便從三十歲立定脚力做去、縱待八九十歲覺悟、也當據見定箇住硬塞做去」。

(2) 相將 やがて、そのうちすぐに。卷二一八・76条(二八五七頁)「理會這箇、且理會這箇。莫引證見、相將都理會不得」。

【二二〇・101】

(先生が) 南城の熊氏に言われた。

朱子「聖賢の言葉は、我々の日常の言葉と同じようなものだ。いま聖賢の言葉を集めて日常の言葉のように身近なものにしてこそよいのであって、(聖賢の言葉を解釈するために)あれこれ別の言葉を引いてきて

はならない。この言葉が分からないからと別の言葉を引いてくるといふようにやっていると、結局どちらも理解できない。もしこの言葉が分かれば、すぐに別の言葉も自然に分かるようになるのだ。」 「董銖」

謂南城（1）熊曰「聖賢語言、只似常俗人說話。如今須是把得聖賢言語、湊得成常俗言語、方是、不要引東引西。若說這句未通、又引那句、終久兩下都理會不得。若這句已通、次第（2）到那句、自解通。」 「銖」

（1）南城 南城県。現在の江西省撫州市の一部。

（2）次第 すぐに、まもなく。卷二二〇・123条にも見える。

（97）101条担当 江波戸（互）

【二二〇・102】

朱子「本を読むには、粗雑すぎてもいけないし、厳密すぎてもいけない。陳徳本は粗雑すぎるきらいがあり、楊志仁（復）は厳密すぎるきらいがある。いったい、あまりにも厳密にすぎると、やがて道理を考えても行き詰まってしまい、それ以上突き進めなくなる。（そういう時は）とりあえず置いておいて、ゆつたり大まかに読んだほうがよい。」 「呂燾」

看文字、不可過於疏、亦不可過於密。如陳德本有過於疏之病、楊志仁有過於密之病。蓋太謹密、則少間看道理從那窮處去、更插不入。不若且放下、放開闊（1）看。〔燾〕

（1）開闊 広々としている様、からつと明るい様。卷二一七・42条（二八一・九頁）「看道理要那大處看、便前面開闊」、卷八・130条（二四四頁）「開闊中又着細密、寬緩中又着謹嚴」。

【二二〇・103】

朱子「器之（陳埴）は書物の理解がはやくなった。（蔣）叔蒙もちやんと理解できるようになり、以前とは違う。」〔葉賀孫〕

器之看文字見得快。叔蒙亦看得好、與前不同。〔賀孫〕

【二二〇・104】

許敬之は講義に參席し、たびたび議論を重ねたが、意見が合わなかった。朱子「学問をして道理がまだ理解できていなくとも害はない。經書を解釈してその意味がまだ分からなく

とも害はない。(そんなことよりも) 先ずは静かに人の話を聞いて、どういう脈絡かを考えなさい。(君のように) ひたすら強弁して、まったく人の話を聞かないようでは、胸中に自ら律するものがなく、やがては傲慢で憚るところのない人間になってしまうだけだ。」

〔陳淳〕

許敬之侍教、屢與言、不合。曰「學未曉理、亦無害。說經未得其意、亦無害。且須靜聽說話、尋其語脈是如何。一向強辨、全不聽所說、胸中殊無主宰、少間只成箇狂妄(校1)(1)人去。」

〔淳〕

(校1) 楠本本は「妄」を「忘」に作る。

(1) 狂妄 憚るところのない、傲慢で思い上がった。卷九五・147条(二四五二頁)「志不大則卑陋、心不小則狂妄。江西諸人便是志大而心不小者也」。

【二一〇・105】

(劉) 淳叟「読書をしている時には、静の修養はできないように感じます。読書の時と虚静の時と、両方必要なのです。」

朱子「私がかつて李(侗)先生に師事していた時、いつも静坐をするよう教えられた。後に静坐よりも「敬」の一字がよいことが分かった。何事もない時には自ら心を把持するところで「敬」する。」

うものは、(莊子の所謂)「無何有の郷(何ものも存在しない虚無の空間)」に陥らせてしまつてはならず、我が身のここに収斂させなければならぬ。」物事に対応する時には対応することにおいて「敬」し、読書をする時には書物を読むことに「敬」する。そうすれば自然に動と静を貫いて、心がどんな時にも保たれるようになるのだ。」

〔廖徳明〕

淳叟問「方讀書時、覺得無靜底工夫。須(校1)有讀書之時、有虚靜之時。」曰「某舊見李先生、嘗教令靜坐(1)。後來看得不然、只是一箇敬字好。方無事時、敬於自持。「凡心不可放入無何有之郷(2)、須收斂在此。」及應事時、敬於應事。讀書時、敬於讀書。便自然該貫動靜、心無時不存。」

〔徳明〕

(校1) 楠本本は「須」を「得」に作る。

(1) 李先生嘗教令靜坐 卷十二・84条(二二〇頁)「明道延平皆教人靜坐。看來須是靜坐」、同・137条(二二六頁)「明道教人靜坐、李先生亦教人靜坐。蓋精神不定、則道理無湊泊處」。朱熹は靜坐をあくまでも補助的な方法として認めている。卷一〇三・11条(二六〇二頁)「靜坐理會道理、自不妨。只是討要靜坐、則不可。理會得道理明透、自然是靜。今人都是討靜坐以省事、則不可」。

(2) 無何有之郷 『莊子』逍遙遊「今子有大樹患其無用、何不樹之於無何有之郷廣莫之野、彷徨乎無爲其側、逍遙乎寢臥其下」。

【二一〇・106】

先生は劉淳叟が目を閉じて座っているのをご覧になって言われた。

朱子「淳叟は（『莊子』に所謂）物を遺れよう（事物の存在を忘れよう）としている。物はそもそも遺れることなどできないのに。」

「余大雅」

先生見劉淳叟閉目坐、曰「淳叟待要（1）遺物（2）、物本不可遺。」

「大雅」

（1）待要 「想要」に同じ。ししようとする。

（2）遺物 『莊子』田子方「丘也眩與、其信然與。向者先生形體掘若槁木、似遺物離人而立於獨也。」

【二一〇・107】

席上、劉淳叟のことに話題が及んだ。

朱子「あそこまで変ってしまうとは思わなかった。以前上奏に赴いた時に会ったが、陸子静（九淵）の学問は大いに間違っていると口を極めて非難していた。そこで私は詰問して、陸子静の學術の是非は公論に付せば自ずと分かるもの、君がどうしてそのように言わなければならない、と言ってやった。こういったとこ

ろからも、彼の薄っぺらさが分かるというものだ。それでも初めは（陸子静を）深く信じていたのだから、結局自分に人を見る目がないと吹聴しているようなものだ。」　　【葉賀孫】

坐間有及劉淳叟事。曰「不意其變常至此。某向往奏事時來相見、極口說陸子靜之學大謬。某因詰（校1）之云、若子靜學術自當付之公論、公如何得如此說他。此亦見他質薄處。然其初間深信之、畢竟自家喚做不知人。」　　【賀孫】

（校1）楠本本は「詰」を「誥」に作る。

【二一〇・108】

朱子（蘇洵の）辨姦論に「事の人情に近からざる者は、大姦隠たらざること鮮すくなし（人としての情に遠い者は、大悪人にならない方が少ない）」とある。常々この言葉は言い過ぎではないかと疑っていたが、今ではそういう者もいることが分かった。かつて私が江西に行つて子寿（陸九齡）と話をしていた時、劉淳叟（字、堯夫）はひとり後ろの隅に座り、話も聞かずに道家の打坐をしていた。私は、たとえ私と陸氏の話があるに足らないものだとしても、我々は君より年長だ、どうしてそんなふざけた真似をするのか、と叱つてやった。」　　【黄義剛】

辨姦論（1）謂事之不近人情者、鮮不爲大姦慝。每常嫌此句過當、今見得亦有此樣人。某向年過江西與子壽對語、而劉淳叟堯夫（校1）獨去後面角頭坐、都不管、學道家打坐。被某罵云、便是某與陸丈言不足聽、亦有數年之長、何故恁地作怪（2）。

〔義剛〕

（校1）楠本本は「夫」を「天」に作る。

（1）辨姦論 蘇洵の文章。「姦」は王安石を指す。卷一三〇・63条（三一〇九頁）「老蘇辨姦、初間只是私意如此。後來荊公做不著、遂中他説」。

（2）作怪 怪しげな（ことをする）、悪ふざけをする。卷一三一・39条（三一五六頁）「竊意秦老只是要兵柄入手、此事做未成。若兵柄在手、後來必大段作怪」。

【一二〇・109】

劉淳叟のことに話が及んで、

朱子「補充粹の通判くらいなら務まるだろう。」

三吏を治めることを論じて、

朱子「漕運司みずからやってきてやるのもよいが、そうでなければ他の者を遣って委任することだ。劉淳

叟は自分からやりすぎてしまったので、問題になったのだ。」

そこで、趙帥は話のわかる人なのに、どうして塩の弊害について一言も言わないのか議論になった。

朱子「私がどうして介入できようか。だいたい物事は慎重が一番で、出すぎたまねは慎むことだ。」

〔呉振〕

因論劉淳叟事、云「添差倅（1）亦可以爲。」論治三吏（2）事、云「漕（3）自來爲之亦好。不然、委別了事人。淳叟自爲太掀揭、故生事。」因論今趙帥（4）可語、鹽弊（5）何不一言。云「某如何敢與。大率以沈審爲是、出位爲戒（6）。」

〔振〕

（1）添差倅 宋代の制度において、正官の他に補充倅で置く官吏を「添差」という。「倅」は通判の俗称。

（2）三吏 未詳。

（3）漕 漕運司の簡稱。税の取り立てや食料の出納を管理する。

（4）趙帥 趙汝愚のことか。

（5）鹽弊 当時、福建のあちこちで塩税に関する不正の問題が起こっていた。卷一一一・36条（二七二

三頁）「閩下四州鹽法分稅、上四州官賣。浙東紹興四州邊海亦合如閩下四州法、而官賣之、故其法甚弊」。

（6）大率以沈審爲是、出位爲戒 『考文解義』はこの部分を記録者の言葉ではないかとしている。

【二一〇・110】

陳寅仲が劉淳叟について質問した。

朱子「劉淳叟は、學問に努めている時にも陳正己（剛）に勝っているが、でたらめぶりも陳正己以上のものがある。陳正己は輕薄だ。以前あちらに行つた時、彼の考えは大いに輕薄で、何事に対しても自分の考える正しさを主張しているだけのように感じた。彼の性格が元々はくどくどしいところにもつてきて、後にかの陳同父（亮）と意氣投合してしまつたのだ。そればかりか伯恭（呂祖謙）が彼を指導した時に、立身出世のしかたや処世術ばかりを教えてしまつたのだ。伯恭の教え方は、どうしてそうなつてしまつたのだろうか。」
先生は笑つて言われた。

朱子「以前、彼（伯恭）の門人が著した祭文を目にしたが、そこには、「有能な者には、功名を立て文章を作ることを教え、無能な者には、正心誠意を語つた」とあつたよ。」
〔黄義剛〕

陳寅仲問劉淳叟。曰「劉淳叟、方其做工夫時、也過於陳正己（一）。及其狼狽、也甚於陳正己。陳正己輕薄、向到那裏、覺得他意思大段輕薄、每事只說道他底是。他資質（校一）本自撈攘（二）、後來又去合那陳同父。兼是伯恭教他時、只是教他權數了。伯恭教人、不知是怎生地至此。」笑云「向前見（校二）他門人（校

3) 有簡祭文云、其有能底、則教他立功名作文章。其無能底、便語他正心誠意(3)。」

[義剛]

(校1) 正中書局本は「資質」を「姿質」に作る。

(校2) 朝鮮整版は「見」を「是」に作る。

(校3) 底本は「們人」に作るが、諸本に抛り「門人」に改めた。

(1) 陳正己 陳剛(字、正己)は、もと陸九淵に師事していたが、朱門にも出入りし、朱熹の前で陸氏を批判している。卷一二四・15条(二九七二頁)、28条(二九七四頁)参照。朱熹が陳剛に与えた書簡に、次のような批判が見える。『文集』卷五四「答陳正己」第一書「是以所論嘗有厭平實而趨高妙、輕道義而喜功名之心。其浮陽動任俠之意、往往發於詞氣之間、絶不類聖門學者氣象。不知向來伯恭亦嘗以是相規否也」。

(2) 撈攘 だらだらとまとまりがない、煩瑣ですつきりとしていない。また「勞攘」に作る。卷十五・146条(三一二頁)「然這裏只是說學之次序如此、說得來快、無恁地勞攘、且當循此次序」、卷七四・27条(一八八〇頁)「坤最省事、更無勞攘」。

(3) 正心誠意 『大学』(章句經一章)。

朱子「陳正己（剛）について、薛象先（叔似）は彼の何を評価しているのかね。」

（葉）賀孫「才覚があることを評価しているのだと思います。」

汪長孺（徳輔）「才覚などあるものですか。まったく何をやってものになりません。」

朱子「叔権（姜大中）が君（長孺）に、「後日、氣質の変化ぶりを観て、それによって学問の進み具合を確かめる」と言ったが、この言葉が（今の君の発言に対しては）一番だ。だいたい人は何事に対してもきめ細やかに考え、静かに落ち着いていなければならぬ。『大学』には「止まるを知りてのち定まる有り、定まりてのち能く静かに、静かにしてのち能く安んじ、安んじてのち能く慮り、慮りてのち能く得」とあるが、ある事柄について、「知る」ことがここ（「止まる」「レベル」）まで到っていないければ、考え方が「定まる」ことはなく、「定まる」ところのない考えでその事柄を断定しようとしても、どうしてすっぱり断ずることができようか。物事にはそれぞれ長短がある。どこが長で、どこが短か、自分で実際に理解しなければいけない。いま何が何でもその短所だけにこだわっている、長所も一緒に見失ってしまう。そんなことをしていれば、やがて何も分からなくなってしまう。

『礼記』に「疑事は質すこと母かれ。直にして而も有すること勿かれ（疑問があつてもすぐに穿鑿してはならない。率直にものを言うのはよいが、あくまでも我を張ろうとしてはいけない）」とある。古人はみなこのように（慎重で）物事をいい加減にはしなかったということだ。だからこそ周（敦頤）先生には「主静」の説があり、『易』の蒙・艮の二卦にも「静」や「止」の本質が具わっているのだ。（『書経』の）洪範の五事（慎むべき五つの事）にも、「聴には聡を曰ふ（聴く時には聞き漏らさない聡さが大切だ）」、「聡は

謀を作す（耳聡さは物事に対処する明敏さとなる）」とある。「謀」は（五行の）金に対応するが、金には静かで細やかというような意味がある。人が「謀」をなすにも、静かで細やかでなければならぬのだ。また、「貌には恭を曰ふ（顔の表情は恭しさが大切だ）」、「恭は肅を作す（恭しきは肅しさととなる）」とある。「肅」は（五行の）水に対応し、水には細やかで潤いのあるという意味がある。人の拳動も、細やかで潤いのあるものでなければならぬのだ。聖人の聖人たる所以は、（『易』の艮卦にある）「動静、其の時を失わず（動くも止まるも、時宜を見失わない）」、「時止まれば則ち止まり、時行けば則ち行く（止まる時には止まり、行くべき時には行く）」ということに他ならない。聖人のこうした所は本当に良い手本として真似しなければならない。それなのに、君はそもそもそんなふうで浮ついて落ち着かずについて、どうして（『中庸』にいう）「発して節に中る（心の動きが適切さを保つ）」ことができようか。何をしても何事も成し得ず、人を評価しても着実なことが言えない。」

朱子「老子の術は、一步退くところにある。何かをするにも前に出て行かず、何かを言うにもはつきり言わず、ただ人が追い詰められた時に、おもむろにやって来て対応するのみだ。例えばもめごとが起こっている時には、その渦中から離れた静かなところに身を置いて、成り行きの如何に任せる。そのことの利害や長短を、逐一冷静に観察し、横から一手を下すのであるから、定めし的確であろう。これはもちろん良くない術策だが、昨今の浮ついてでたらめばかりを言う輩と比べれば、まだいくらかましだ。」

そこで『老子』の言葉を挙げられた。「豫として冬に川を渉るが若く、猶として四隣を畏るるが若く、儼としてそれ客の若く、渙として冰の將に积けんとするが若し（おずおずと冬の川を渡るように慎重に、びく

びくと周囲を警戒するように用心深く、威儀を正した客のように嚴肅であり、解けてゆく水のように素直である。」

朱子「子房（張良）は老子の学に精通していた。曹參はこれを学び、本質はつかんでいたがそれを実践に役立てることはできなかった。」
〔葉賀孫〕

先生説「陳正己、薛象先（1）喜之者何事。」賀孫云「想是喜其有才。」汪長孺謂「併無其才、全做事不成。」曰「叔權謂長孺、他日觀氣質之變、以驗進道（校1）之淺深。此説（校2）最好。大凡人須是子細沈靜、大學謂、知（校3）止而後有定、定而後能靜、靜而後能安、安而後能慮、慮而後能得（2）。如一件物事、自家知得未曾到這裏、所見未曾定。以無定之見、遂要決斷此事、如何斷得盡。一件物事、有長有短。自家須實見得他那處是長、那處是短。如今便一定把著他短處、便一齊沒他長處。若只如此、少間一齊不通。禮記云、疑事毋質、直而勿有（3）。看古人都是恁地不敢草草。周先生所以有主靜之説（4）、如蒙艮二卦、皆有靜止之體（5）。洪範五事、聽曰聰、聰作謀（6）。謀屬金（7）、金有靜密意思。人之爲謀、亦欲靜密。貌曰恭、恭作肅（8）。肅（校4）屬水（9）、水有細潤意思。人之舉動、亦欲細潤。聖人所以爲聖人、只是動靜不失其時、時止則止、時行則行（10）。聖人這般所在、直是則得好（11）。自家先恁地浮躁、如何要發得中節（12）。做事便事事做不成、説人則不會説得著實。」又曰「老子之術、自有退後一著（13）。事也不攙前去做、説也不會説將出、但任你做得狼狽了、自家徐出以應之。如人當紛爭之際、自去僻靜處坐、任其如何。彼之利害長短、一一都冷看破了、從旁下一著。定是的當、此固是不好底術數。然較之今者浮躁胡説亂道

底人、彼又較勝。」因舉老子語豫兮若冬涉川、猶兮若畏四鄰、儼若客、渙若冰將釋（14）。子房深於老子之學（15）。曹參學之（16）、有體而無用。〔賀孫〕

（校1）底本は「進退」に作るが、諸本に拠り「進道」に改めた。

（校2）朝鮮整版は、「説」を「誠」に作る。

（校3）正中書局本は、「知」を「之」に作る。

（校4）正中書局本・朝鮮整版は、「肅」を「恭」に作る。

（1）薛象先 薛叔似、字は象先。永嘉学派の薛季宣の兄の子。『資料索引』五卷四一九四頁。『学案』卷五二。『宋史』卷三九七。卷一一四・36条（二七六五頁）参照。

（2）大學謂く慮而後能得 『大学』（章句経一章）。

（3）禮記云、疑事毋質、直而勿有 『礼記』曲礼上。

（4）周先生所以有主靜之説 周敦頤『太極図説』「聖人定之以中正仁義、而主靜」。

（5）如蒙艮二卦、皆有靜止之體 『易』艮卦・象伝「艮、止也。時止則止、時行則行、動靜不失其時、其道光明」、蒙卦・象伝「蒙、山下有險、險而止、蒙」。なお、周敦頤『通書』の最終章の表題は「蒙 艮」。朱熹は「此章發明二卦、皆所謂聖人之蘊、而主靜之意矣」と注している。

（6）洪範五事、聽曰聰、聰作謀 『書経』洪範「二、五事。一曰貌、二曰言、三曰視、四曰聽、五曰思。

貌曰恭、言曰從、視曰明、聽曰聰、思曰睿。恭作肅、從作乂、明作哲、聰作謀、睿作聖」。

(7) 謀屬金 『書經』洪範の注(6)所引部分の前に「一、五行。一曰水。二曰火。三曰木。四曰金。五曰土」とある。五行と五事を対応させれば、「四曰金」||「四曰聽」「聽作謀」となる。なお、『書集傳』は五事の箇所で、「貌言視聽思者、五事之叙也。貌澤、水也。言揚、火也。視散、木也。聽収、金也。思通、土也」と注し、貌言視聽思それぞれに五行を配当している。

(8) 貌曰恭、恭作肅 注(6)参照。

(9) 肅屬水 注(7)参照。

(10) 動靜不失其時、時止則止、時行則行 『易』艮卦・彖伝。注(5)参照。

(11) 則得好 未詳。訳文は、「則」を「則る」「手本にする」の意味の動詞として解釈した。『考文解義』は「未詳。則似指上文兩則字。謂隨時處得好也」とする。

(12) 發得中節 『中庸』(章句首章)「喜怒哀樂之未發、謂之中。發而皆中節、謂之和」。

(13) 老子之術、自有退後一著 卷一二五・36条(二九九六頁)「老子之學只要退步柔伏、不與你爭。…常見畫本老子便是這般氣象、笑嘻嘻地、便是箇退步占便宜底人」。

(14) 老子語々渙若冰將釋 『老子』十五章。

(15) 子房深於老子之學 子房は、漢の高祖の參謀役を務めた張良。老子の学との関係については、卷一二五・5条・6条・7条(二九八七頁)・36条(二九九六頁)を参照。山田俊『朱子語類』訳注 卷百二十五』(汲古書院、二〇一三年)に詳しい注釈がある。

(16) 曹參學之 曹參は漢の高祖の名臣。卷一二五・7条(二九八七頁)・26条(二九九二頁)・27条(二

【二一〇・112】

汪德輔「姜叔權（大中）は自分で、終日思慮することが無く、『易』にいう「寂然不動」の意味を体得したと言っておりますが、私は彼が本当にその境地に到達したのか疑わしく思っております。」

朱子「彼に（「寂然不動」の下文にある）「感じて遂に天下の故に通ず」ることのできるのか尋ねてみればいい。（天下の事柄に通じるためには、やはり）理を窮めなければならないのだ。それだけで済めば、『大學』に所謂「格物致知」を言う必要はない。」

汪德輔「ということは、叔權の得た静の境地は、まだ究極のものではないということでしょうか。」
朱子「もちろんだ。」

〔汪德輔〕

問「姜叔權自言終日無思慮、有寂然不動（1）之意。德輔疑其已至。」曰「且（校1）問他還能感而遂通天下之故（2）否。須是窮理。若只如此、則不須說格物致知（3）。」問「如此、則叔權之靜未是至。」曰「固是。」

〔德輔〕

(校1) 正中書局本・朝鮮整版は「且」を「只」に作る。

(1) 寂然不動 『易経』繫辞上伝「易無思也、無爲也。寂然不動、感而遂通天下之故」。

(2) 感而遂通天下之故 注(1) 参照。

(3) 格物致知 『大学』(章句経一章)。

【二一〇・113】

戴明伯が教えを請うた。

朱子「先ずは一冊の書物を読みなさい。聖人の言葉は聖人の心そのものであり、聖人の心は天下の理なのだ。とりあえず一段ごとに読んで明確にし、一段が明確になったら、さらに次の一段を読む。そのように十段二十段に至っても、まだ道理というものが理解できないかもしれない。しかし、そうやって心を穏やかにして気持ちを落ち着かせ、東へ行ったり西へ行ったりと右往左往せずに行けば、道理は自ずと一つ一つ分かってくる。自分の心にある欠点を一つ取り払えれば、一つ道理が明らかになるのだ。道理はもともと自分の中にあるのだが、今は(肉体の気に)隔てられてしまっているから、徐々に磨きをかけ、呼び覚まして(本来の姿に)復帰する必要があるのだ。とはいえ、一度呼び覚ませばすぐに分かるなどという道理はない。金溪の学問(陸九淵の学派)などはしきりに「自得」を求めるが、自得したものが正しければまだしも、間違ったものならばどうするつもりか。ひとまず虚心に書物を読むのが一番だ。読書においては、決して自分か

ら理解できたと言つてはいけない。たとえ理解できても、ひとまず理解できていないと見做すのだ。私が見るところ、理解できていないと言ふ者には長足の進歩があり、進歩しない者の多くは理解できたと自分で口にしてゐる連中だ。そんなことをしてゐては、生涯進歩しないだけではなく、仏教のいう「三生六十劫」かかつて結局理解できないのだ。」

朱子「まちがつて東に向かつてしまった心を、西の方へ呼び戻すことができたとしても、その心はさつきまで東に向かつていた心に外ならない。ただちよつと押しとどめて方向を変えて置いてみたに過ぎず、元來何も改まつてはいないのだ。ある者がかつて仏教に流れ、日々『金剛經』や「大悲呪」を唱え続けていた。後に念仏はやめたが、こちらで『大学』や『論語』や『孟子』を読んでも、以前の通り読誦回数を追い求めて、慌ただしく読み上げていく。これも先の例と同様「大悲呪」を唱えていた時の気持ちのまま儒書を読んでいるに過ぎないのだ。」

「具必大」

戴明伯請教。曰「且將一件書讀。聖人之言即聖人之心、聖人之心即天下之理。且逐段看令分曉、一段分曉、又看一段。如此至一二十段、亦未解便見箇道理。但如此心平氣定、不東馳西驚、則道理自逐旋（1）分明。去得自家心上一病、便是一箇道理明也。道理固是自家本有、但如今隔一隔了、須逐旋揩磨（2）呼喚得歸。然無一喚便見之理。如金溪只要自得（3）。若自得底是固（校1）善、若自得底非却如何。不若且虚心讀書。讀書、切不可自謂理會得了。便理會得、且只做理會不得。某見說不會底、便有長進。不長進者、多是自謂已理會得了底。如此、則非特終身不長進。便假如釋氏三生六十劫（校2）（4）、也終理會不得。」又云「此心

先錯用向東去、及至喚回西邊、又也只是那向東底心。但只列轉(5)些頓放、元不會改換。有一學者先佞佛(6)、日逐(校3)念金剛大悲呪(7)不停口。後來雖不念佛、來誦大學論孟、却依舊趕徧數、荒荒忙忙誦過、此亦只是將念大悲呪時意思移來念儒書爾。」
〔必大〕

(校1) 楠本本は「固」を「箇」に作る。

(校2) 底本・正中書局本・朝鮮整版・楠本本は「三生六十劫」を「三生十六劫」に作る。和刻本に従い改めた。注(4)参照。

(校3) 朝鮮整版は「日逐」を「逐日」に作る。

(1) 逐旋 徐々に。順を追つて、一つ一つ。卷七一・36条(二七八八頁)「陽生時、逐旋生、生到十一月冬至、方生得就一晝陽」。

(2) 揩磨 拭い去る、磨きをかける。卷十四・15条(二五一頁)「大學重處都在前面。後面工夫漸漸輕了。只是揩磨在」、卷十四・115条(二七一頁)「但從來爲氣稟所拘、物欲所蔽、一向昏昧、更不光明」。

而今却在挑剔揩磨出來、以復向來得之於天者、此便是明明德」、卷一〇四・45条(二六二頁)「歐陽公則就作文上改換、只管揩磨、逐旋捱將去、久之漸漸揩磨得光」。

(3) 金溪只要自得 金溪(今の江西省撫州市)は陸九淵の出身地。卷二七・52条(六八三頁)「江西學者偏要說甚自得、說甚一貫。看他意思、只是揀一箇儻侗底說話、將來籠罩、其實理會這箇道理不得」。

(4) 釋氏三生六十劫 悟るまでに利根でも三生、鈍根は六十劫かかるといふことで、無限に長い時間を

意味する。あるいは永遠に悟れないという意味でも用いられる。『碧巖録』七則「向這裏薦得去、可以丹霄独歩。你若作情解、三生六十劫」。

(5) 列轉 未詳。「列」は「遯」(遮る、止める)の意味か。『考文解義』も「列、未詳」とする。

(6) 佞佛 御利益を得ようと仏に媚びへつらうこと。仏教信者を悪く言う言葉。

(7) 大悲呪 『千手千眼大悲心陀羅尼』のこと。呪語として読誦の対象とされていた。卷一三〇・62条

(三一〇九頁)「有一等人能談仁義之道、做事處却乖。此與鬼念大悲呪一般、便無奈何他處」。

【二一〇・114】

括蒼の徐元明「名は琳」と鄭子上(可学)が揃ってお目にかかった。

朱子「『孟子』に」「博く学びて詳らかに之を説くは、將に以て反て約を説かんとすればなり(博く学んで事細かに説くのは、むしろ簡約を説くためである)」とあるが、いま江西の者たちの学問は簡約を求めるばかりで、博く学ぼうとしない。彼らはもともと多少はよいところもあるのだが、物事に臨むと全てでたためでいい加減だ。一方、呂子約(祖儉)に至っては、ひたすら博学に努めるばかりで、簡約に立ち返ることができない。多くの書物を読み、博引旁証してあれこれ言うのはどれも理に適っているのだが、すつきりせず緊要さに欠け、つなげて意味の無いことがある。沈叔晦(煥)は書物を読まず、人を教育せず、浅く狭いものを守っているだけだ。少し道理が分かるとそれをじっと守って固執してしまう。これもやはり博く学

ばないことの弊害だ。」

〔滕璘〕

括蒼（校1）（1）徐元明（2）「名琳」、鄭子上同見。先生說「博學而詳說之、將以反說約也（3）。今江西諸人之學、只是要約、更不務博。本來雖有些好處、臨事盡是鑿空杜撰。至於呂子約（4）、又一向務博、而不能反約。讀得書多、左牽右撰、橫說直說、皆是此理。只是不潔淨（5）、不切要、有牽合（6）無謂處。沈叔晦不讀書、不教人、只是所守者淺狹。只有些子道理、便守定了、亦不博之弊。」

〔璘〕

（校1）正中書局本・朝鮮整版・楠本本は「括蒼」を「栝蒼」に作る。

（1）括蒼 地名。今の浙江省麗水市。

（2）徐元明 『門人』（一八〇頁）に拠れば、卷二二〇・72条〜74条（二九〇三頁〜二九〇五頁）等に見える徐元昭と同一人物であり、字は「元昭」が正しい。

（3）博學而詳說之、將以反說約也 『孟子』離婁下。卷五七・29条（一三四五頁）「約自博中來。既博學、又詳說、講貫得直是精確、將來臨事自有箇頭緒。才有頭緒、便見簡約。若是平日講貫得不詳悉、及至臨事只覺得千頭萬緒、更理會不下、如此則豈得爲約」、卷十八・18条（三九五頁）「今人務博者却要盡窮天下之理、務約者又謂反身而誠、則天下之物無不在我者、皆不是」。

（4）呂子約 呂祖儉、字子約、呂祖謙の弟。卷二二一・37条（二九五六頁）「呂子約死。先生曰、子約竟齋著許多鶻突道理去矣」。

(5) 潔淨　すつきり清潔なこと。すつきりしていて余計なものが何もないこと。卷一一六・50条(二八〇四頁)「如此屋相似、只中間潔淨、四邊也未在。未能博學、便要約禮」、卷一一三・24条(二七四五頁)「横渠説做工夫處、更精切似二程。二程資稟高、潔淨、不大段用工夫。横渠資稟有偏駁夾雜處、他大段用工夫來」。

(6) 牽合　つなげる、つながる。卷十一・57条(二八四頁)「看文字、且逐條看。各是一事、不相牽合」。

(112) 114条担当　阿部 光麿

【二一〇・115】

陸深甫(濬)が学問のしかたについて質問した。

朱子「君の家の年長者はどういうふうに教えているのだ。」

陸深甫「大叔父の刪定(陸九淵)には「心はもともと完全無欠で足りないものはない。人はこの心を悟つてはじめて学問ができるのだ」と教えられました。」

朱子「この心はもちろん完全無欠だが、それでも一つ一つの事を正しく行うことができはじめて完全無欠なのだ。もともと足りないものはない、これさえ悟ればいいと言うだけならば、そんな道理があるものか。」
そこでまた言われた。

朱子「江西の学者たちは自ら陸刪定の学問を体得したと思ひ込んで、大いに弁舌を振るい、憚るところが

ない。ある日突然道を悟ったと言うくせに、翌日には人と酒を飲み、大いに人を罵っている。思うに、賈誼は「秦の二世、今日即位して明日人を射る」と言ったが、今の江西の学者たちは今日道を悟ったら、明日には人を罵る、といった具合だ。いったい何の道を悟っているのやら。」

〔潘時拳〕

陸深甫（1）問爲學次序。曰「公家庭尊長平日所以教公者如何。」陸云「刪定（2）叔祖所以見教者、謂此心本無虧缺、人須見得此心、方（校1）可爲學。」曰「此心固は無虧缺、然須是事事做得是、方無虧缺。若只說道本無虧缺、只見得這箇便了、豈有是理。」因說「江西學者自以爲得陸刪定之學、便高談大論、略無忌憚。忽一日自以爲悟道、明日與人飲酒、如法罵人（3）。某謂賈誼云、秦二世今日即位而明日射人（4）。今江西學者乃今日悟道而明日罵人、不知所悟（校2）者果何道哉。」

〔時舉〕

（校1）楠本本は「方」を「万」に作る。

（校2）底本は「所修」に作るが、諸本に拠り「所悟」に改めた。

（1）陸深甫 陸九淵の長兄たる陸九思の孫。『門人』二二七頁、『資料索引』三卷二六六〇頁。

（2）刪定 陸九淵を指す。陸九淵は刪定官に任じられたことがあり、陸刪定とも呼ばれる。

（3）明日与人飲酒、如法罵人 『文集』卷五五「答包頭道」第二書に「從頭罵去、如人醉酒發狂」という類似した文句が見られる（包頭道（揚）は、陸九淵の門人）。陳来『朱子書信編年考証』（増訂本、生活・読書・新知三聯書店、二七一頁）は、これを取り上げて「皆力斥陸氏門人之狂」としている。「如

法」は未詳。「如法了得（非常にすばらしい）」を参考に訳したが、「例のごとく」の意味の可能性もあるか。

(4) 秦二世今日即位而明日射人 『漢書』賈誼伝第十八「夫三代之所以長久者、以其輔翼太子有此具也。及秦而不然。其俗固非貴辭讓也、所上者告訐也。固非貴禮義也、所上者刑罰也。使趙高傳胡亥而教之獄、所習者非斬劓人、則夷人之三族也。故胡亥今日即位而明日射人、忠諫者謂之誹謗、深計者謂之妖言、其視殺人若艾草菅然」。ほぼ同じ内容は『大戴礼記』保傅第四十八にも見える。

【二一〇・116】

包詳道（約）からの手紙に「壬子（紹熙三年、一一九二年）九月にひとたびはつと悟つて以降」云々とあった。

先生は（兄の）顯道（包揚）に言われた。

朱子「人の心の存亡は息を吸って吐く間にある（存したかと思えばすぐに亡び、亡んだかと思えばすぐに存す）。どうして今日のこの時まででたらめをやっていて、その後すぐにおとなしくなるというような道理があるか。聖賢の学問は一步一步確実にやって行って、知らず知らずに自然にやり遂げることが出来るものだ。もし（包詳道の）言う通りなら、聖賢の修養や学問は必要なくなり、ただある日突然はつと悟るのを待ち続けるだけとなってしまう。そういう考えは、人に僥倖を期待する心を起こさせるものだ。」 「黄

義剛】

包詳道書來言「自壬子九月一省之後」云云。先生謂顯道曰「人心存亡之決（1）、只在出入息之間。豈有截自今日今時便鬼亂（2）、已後便悄悄之理。聖賢之學、是措措定定做、不知不覺、自然做得徹。若如所言、則是聖賢修爲講學都不須得、只等得一旦恍然悟去（3）、如此者起人僥倖之心（4）。」〔義剛〕

（1）人心存亡之決 『孟子』告子上「孔子曰、操則存、舍則亡、出入無時、莫知其鄉、惟心之謂與」。

卷二七・51條（六八二頁）「今有一種學者、愛說某自某月某日有一箇悟處後、便覺不同。及問他如何地悟、又卻不說。便是曾子傳夫子一貫之道、也須可說、也須有箇來歷、因做甚麼工夫、聞甚麼說話、方能如此。今若云都不可說、只是截自甚月甚日爲始、已前都不是、已後都是、則無此理。已前也有是時、已後也有不是時。蓋人心存亡之決、只在一息之間、此心常存則皆是、此心才亡便不是。聖賢教人、亦只據眼前便著實做將去」。

（2）鬼亂 であらめをやる。『語類』ではここだけに見える表現。

（3）只等得一旦恍然悟去 『文集』卷五五「答包詳道」第二書「示喻爲學之意、自信不疑如此、他人尚復何說。然觀古人爲學只是升高自下、步步踏實、漸次解剥、人欲自去、天理自明、無似此一般作捺紐捏底工夫、必要豁然頓悟、然後漸次修行也」。

（4）起人僥倖之心 卷一一五・10條（二七七二頁）「學問亦無箇一超直入之理、直是銖積寸累做將去」。

某是如此喫辛苦、從漸做來。若要得知、亦須是喫辛苦了做、不是可以坐談僥倖而得」。

【二一〇・117】

朱子「孫吉甫（枝）の手紙を読むと、文章を作ることばかりに血道を上げる癖が抜けきれないようだ。たとえば兩漢・晋・宋・隋・唐それぞれの風俗は、誰か一人によつてそのように変わつていったのではない。風俗の変化は、あれこれ変化していつて、自然にそうなつたに過ぎない。漢の末期、名節への尊崇が極まる、（名節などにとらわれず、恬淡とした）清虚へと変じた。陳・隋以後になると、名節も清虚もどうでもよくなつて、ただそろいもそろつて同じように繊細流麗な文章を作ろうとしたというだけだ。政治の表舞台でも、文章というものを一大事として取り組むようになってしまつた。たとえば科挙制度を作つたのは隋の煬帝だが、その後、唐の三百年間を経て本朝の初めに至るまで、ずっと文辭を尊んできたのだ。」

鄭子上（可学）「風俗があれこれ変化して、どうして本朝に至つて、程先生が現われて、聖賢の道理を明かにすることができたのでしょうか。」

朱子「周（敦頤）先生、二程（程顥、程頤）がこのように道理を説くことができたのも、それまでの先賢たちの蓄積を踏まえてこそそのことだ。（宋初の）楊（億）・劉（筠）の時は、ただ文章に取り組んでいただけだったが、范文正（仲淹）・孫明復（復）・石守道（介）・李太伯（觀）・常夷甫（秩）などに至ると、だんだん枝葉を切り落とし、政治に勤め、学問の実践について考えるようになった。胡安定（瑗）が現われて、

治道齋を作つて政治に取り組ませて、だんだんと内面の問題に近づいて行つたのだ。つまり、周氏程氏が道理を明かにできたのは、彼らだけの力によるものではないということだ。」

「滕璘」

「看孫吉甫書、見得是要做文字底氣習。且如兩漢晉宋隋唐風俗、何嘗有箇人要如此變來。只是其風俗之變、滾來滾去（校1）、自然如此。漢末名節之極、便變作清虛底道理。到得陳隋以後、都不理會名節、也不理會清虛、只是相與做一般纖艷底文字。君臣之間、把這文字做一件大事理會。如進士舉是隋煬帝做出來、至唐三百年以至國初、皆是崇尚文辭。」鄭子上問「風俗滾來滾去（校1）、如何到本朝程先生出來、便理會發明得聖賢道理。」曰「周子二程說得道理如此、亦是上面諸公擲（校2）趨（1）將來。當楊劉（2）時、只是理會文字。到范文正孫明復石守道李太（校3）伯常夷甫諸人、漸漸刊落枝葉、務去理會政事、思學問見於用處。及胡安定出、又教人作治道（校4）齋（3）、理會政事、漸漸擲（校2）得近裏（4）、所以周程發明道理出來、非一人之力也。」

「璘」

（校1）正中書局本・朝鮮整版は「滾來滾去」を「袞來袞去」に作る。

（校2）正中書局本・朝鮮整版・和刻本・楠本本は「擲」を「那」に作る。注（1）参照。

（校3）正中書局本・朝鮮整版は「太」を「泰」に作る。

（校4）朝鮮整版は「道」を「事」に作る。注（3）参照。

※以下に掲げる卷一二九・21条（三〇八九頁）は、本条と同一場面の別記録と考えられる。（記録者は鄭可学）。

德粹以明州士人所寄書納先生、因請問其書中所言。先生曰「渠言、漢之名節、魏晉之曠蕩、墮唐之辭章、皆懲其弊爲之。不然。此只是正理不明、相袞將去、遂成風俗。後漢名節、至於末年、有貴己賤人之弊。如皇甫規、鄉人見之、却問、卿在鴈門、食鴈美乎。舉此可見。積此不已、其勢必至於虛浮入老莊。相袞到齊梁間、又不復如此、只是作一般艷辭、君臣賡歌褻瀆之語、不以爲怪。隋之辭章、乃起於煬帝。進士科至不成科目、故遂袞纏至唐、至本朝然後此理復明。正如人有病、今日一病、明日變一病、不成要將此病變作彼病。」某問「已前皆袞纏成風俗。本朝道學之盛、豈是袞纏。」先生曰「亦有其漸。自范文正以來已有好議論、如山東有孫明復、徂徠有石守道、湖州有胡安定、到後來遂有周子程子張子出。故程子平生不敢忘此數公、依舊尊他。若如楊劉之徒、作四六駢儷之文、又非此比。然數人者皆天資高、知尊王黜霸、明義去利。但只是如此便了、於理未見、故不得中。」某問「安定學甚盛、何故無傳。」曰「當時所講止此、只些門人受去做官、死後便已。嘗言劉彝善治水、後來果然。彝有一部詩、遇水處便廣說。」

(1) 挪趨 「那趨」とも書く。移る、移動する。

(2) 楊劉 楊億と劉筠。宋初の「西昆派」の詩人。

(3) 治道齋 北宋の胡瑗（安定）は、湖州州学および太学で「經義齋」「治事齋」という二つの学舎を立てて学生を指導した。本条にいう「治道齋」は「治事齋」を指すか。『遺書』卷二上・34条（一八頁）「胡安定在湖州置治道齋、學者有欲明治道者、講之於中。如治兵治民水利算數之類。嘗言劉彝善治水利、

後果爲政、皆興水利有功」。吾妻重二他『朱子語類』訳注 卷八十四・八十五・八十六』（汲古書院、二〇一四年）卷八四・8条を参照。

（4）近裏 内面的なこと、自分に身近で切実なこと。『遺書』卷十一・172条（一三二頁）「學只要鞭辟近裏、著己而已」。卷三二・64条（八一九頁）「仁字說較近裏、知字說較近外」、同・65条「事也是心裏做出來、但心是較近裏說」。

（115）117条担当 蔣建偉

【二二〇・118】

先生が杜叔高（旂）^{せう}に言われた。

朱子「學問は、実用に適うことが大切だ。」

先生謂杜叔高曰「學貴適用（1）」。（校1）

（校1）正中書局本・朝鮮整版・和刻本は末尾に「節」の小字注がある。

（1）適用 実用に適する。卷九四・185条（二四〇四頁）「凡物皆有此理。且如這竹椅、固是一器、到適用處、便有箇道在其中」。

【二二〇・119】

先生が魯可幾に言われた。

朱子「物事というものは、省察し尽くしてもいけない。」

〔楊道夫〕

先生謂魯可幾、曰「事不要察取盡。」

〔道夫〕

【二二〇・120】

ある人が徐子顔のことを質問した。

朱子「自分なりの信条はあるようだが、どのような見識の持ち主かは知らない。」

〔陳文蔚〕

或問徐子顔。曰「其人有守、但未知所見如何。」

〔文蔚〕

【二二〇・121】

朱子「今の学ぶ者には二種類ある。(一つは)頭の回転が鈍い者で、なかなか理解させることができない。(もう一つは)頭の回転がはやい者で、すぐに理解できるが、しっかりと身についていないのではないかと
思う。龔邨伯なども理解ははやいが、しっかりと身についてはいないのではないだろうか。」
〔葉賀孫〕

今學者有兩様、意思鈍底、又不能得他理會得。到得(校1)意思快捷底、雖能當下曉得、然又恐其不牢固。
如龔邨伯理會也快、但恐其不牢固。 〔賀孫〕

(校1)楠本本、「得」を「徳」に作る。

【二二〇・122】

先生が郭廷碩に尋ねられた。

朱子「最近はどうだね。」

郭廷碩「昔のままの学問です。」

朱子「賢い江西の人には、善を楽しむ者は多くいても、学問を知る者は少ない、ということか。」

朱子「楊誠齋(万里)は清廉潔白であるが、ただこういう人は少ない。謝尚書(謝諤)はもの柔らかで寛大であり、また非常に実直で飾り気がない。かつて、湘(現在の湖南省)の地に赴いた折、謝公の家に寄つ

たことがあった。彼はくずれかけた粗末な家に住み、少しも富貴の気配がなかった。得がたい人物だ。」

朱子「彭子寿（龜年）の邸宅は広大であると聞いているが、どうしてそのようにする必要があろう。」

さらに一、二人のことに言及された。

朱子「こうしてみると、謝尚書はやはり実直で飾り気のない人物だ。」 「曾祖道」

先生問郭廷碩「今如何。」曰「也只如舊爲學。」曰「賢江西人、樂善者多、知學者少。」又說「楊誠齋（1）廉介清潔、直是少。謝尚書（2）和易寬厚、也敏朴直。昔過湘中時、曾到謝公之家（3）、頽然在敗屋之下、全無一點富貴氣（4）、也難得。」又曰「聞彭子壽造居甚大、何必如此。」又及二人、曰「以此觀謝尚書、直是朴實。」 「祖道」

（1）楊誠齋 楊萬里、字誠齋。吉水（現在の江西省吉安市）の人。『資料索引』三二八六頁、『学案』卷四四。

（2）謝尚書 謝諤、字昌国。新喻（現在の江西省新余市）の人。光宗の時、御史中丞、権工部尚書に任じられた。『資料索引』四一〇八頁、『学案』卷二八。

（3）昔過湘中時、曾到謝公之家 朱熹は知潭州として紹熙五年（一一九四）五月から八月まで潭州に赴任していた。『文集』卷八三「跋郭長陽醫書」に、「紹熙甲寅夏、予赴長沙、道過新喻、謁見故煥章學士謝公昌國於其家。公爲留飲、語及長陽冲晦郭公先生言行甚悉」とあり、謝昌国の家を訪問していたこ

とが記されている。なお、李道伝『晦庵先生朱文公語録』（池録）は本条を卷三七・曾祖道録・丁巳所聞に収めており、慶元三年（丁巳・一一九七）の問答となる。

（4）頽然在敗屋之下、全無一點富貴氣 卷一三二・70条（三一八〇頁）「某曾訪謝昌國、問良齋安在。謝指廳事云、即此便是。〔其廳亦敝陋〕。『学案』卷二八「學士謝良齋先生諤」「朱子嘗過之、見其破屋蕭然、歎息以爲不可及」。

【一一〇・123】

朱子「湘郷で昔から南軒（張栻）に従学していた者は誰だね。」

私（蕭佐）は、周奭（字は允升）と自分の外舅（妻の父）の舒誼（字は周臣）だとお答えした。

蕭佐「外舅は亡くなってからすでに数年が経っておりますが、「知言疑義」を論じたものに南軒が答えた書簡一通が、文集の中に載せられております。允升（周奭）が学問に専心していたところは、ちょうど川のほとりに臨んでいたもので、南軒は「漣溪書室」と題しました。その郷里の後学たちはそこで講学に努めておりますが、允升（周奭）自身は今病気で出かけることはできません。」

朱子「南軒がかつて静江（現在の江西省桂林市）で書簡を受け取り、允升のことを非常に称賛していた。きつと格別の見識があるのだろう。こちらに一度来てもらえればよいのだが。すぐに薬を少し送ろう。」

〔蕭佐〕

先生問「湘鄉（1）舊有從南軒遊者、爲誰。」佐對以周爽允升（2）、佐外舅舒誼周臣（3）。外舅沒已數歲、南軒答其論知言疑義一書、載文集中（4）。允升藏修（5）之所正枕江上、南軒題曰漣溪書室。鄉曲後學講習其間、但允升今病不能出矣。」先生曰「南軒向在靜江曾得書、甚稱說允升、所見必別、安得其一來。」次第（6）送少藥物與之。」

〔佐〕

（1）湘鄉 地名、長沙の西南（現在の湖南省湘潭市）。

（2）周爽允升 周爽、字允升、湘鄉の人。『資料索引』一四五八頁、『学案』卷七一。『南軒集』卷二六に「答周允升」が二書見える。

（3）舒誼周臣 未詳。『語類』では本条のみにその名が見える。

（4）南軒答其論知言疑義一書、載文集中 未詳。『南軒集』卷二七に一書だけ「答舒秀才」があるが、『知言疑義』に関する話題は見えない。『知言疑義』は胡宏の『知言』についての疑義を、張栻と朱熹が議論してまとめたもの。

（5）藏修 学問に専心すること。『礼記』学記「君子之於學也、藏焉、脩焉、息焉、游焉、鄭玄注「藏謂懷抱之。脩、習」。

（6）次第 卷二二〇・101条注（2）参照。

【一二〇・124】

直卿（黄榦）が趙友裕からまた（子弟の家庭教師に）招かれたことを先生に申し上げた。

朱子「今の時勢を考えたら、それも致し方ないことだ。どこでも（道理を）人に教え語るしかない。道理を知る人が多くなれば、それも幸いな事だ。」

〔葉賀孫〕

直卿告先生以趙友裕復有相招之意。先生曰「看今世務已自沒可奈何。只得隨處與人說、得識道理人多、亦是幸事。」

〔賀孫〕

【一二〇・125】

呂徳遠（煥）が、妻を迎えるため某日に帰郷する旨をお伝えした。その日になると兄（呂燾）が言った。

呂燾「弟と相談しまして、もうひと月ご教示を賜ってから帰ろうということになりました。」

朱子「君は妻を娶らんとしているのに、どうしてそんなことを言っているのだ。この大事に際し、そのようにすべきではない。きっと君の家の方ではすべて準備を終えて、帰郷を待っているにちがいない。そのようにすることをすべきではない。」

（呂兄弟は）その日のうちに帰郷の途に就いた。

〔黄義剛〕

呂德遠辭、云將娶、擬某日歸。及期、其兄（1）云「與舍弟商量了、且更承教一月、却歸。」曰「公將娶了、如何又恁地說。此大事、不可恁地。宅中想都安排了、須在等待、不可如此了（校1）。」即日歸。

【義剛】

（校1）正中書局本・朝鮮整版は「了」を「呂」に作る（不可如此、呂即日歸）。和刻本は「了」の後に「呂」が入る（如此了、呂即日歸）。

（1）其兄 呂煥の兄・呂燾。字德昭、南康の人。

【二一〇・126】

季繹は蔡季通（元定）に酒を勧め、泉南（福建省泉州）に行くのを引き留めようとした。蔡季通は先生に決を仰ごうとしたが、先生は笑って答えなかった。しばらくしてから、言われた。

朱子（荀子の所謂）身勞して心安き者はこれを為せ、利少なくて義多き者はこれを為せ（身体は疲労するが心は安らかになることならば実行せよ。利は少ないが義が多いことならば実行せよ）。「万人傑」「輔廣の記録：ある人がやろうとしていることについて先生に相談した。先生は「心佚にして身勞すればこれを為せ、利少なくて義多ければこれを為せ」と言われた。」

季繹（1）勸蔡季通酒、止其泉南之行。蔡決於先生、先生笑而不答。良久、云「身勞而心安者爲之、利少而義多者爲之（2）」。「人傑」「廣錄云、或有所欲爲、謀於先生。曰、心佚而身勞、爲之。利少而義多、爲之。」

（1）季繹 未詳。127条の「朱季繹」と同一人物か。『象山語録』卷三にその名が見える。

（2）身勞而心安者爲之、利少而義多者爲之 『荀子』修身「身勞而心安、爲之。利少而義多、爲之。」

【一一〇・127】

先生は、窓の目張りのために糊付けした紙を見て言われた。

朱子「少しでも真っ直ぐにきちんと貼られていないならば、（目張りをする）こと（の）道理ではない。」

朱季繹「見栄えをよくしようと、外から糊付けしたのです。」

直卿（黄榦）「それこそ『大学』に所謂「自ら欺むく」ことの始まりだ。」 「葉賀孫」

先生看糊窗云「有些子不齊整、便不是他道理。」朱季繹（1）云「要好看、却從外糊。」直卿云「此自欺

（2）之端也。」 「賀孫」

(1) 朱季繹 未詳。126条の「季繹」と同一人物か。『象山語録』卷三にその名が見える。

(2) 自欺 『大学』(章句伝六章)「所謂誠其意者、毋自欺也」。朱注「自欺云者、知爲善以去惡、而心之所發有未實也」。

(118) 127条担当 松野 敏之

卷二二二 朱子十八 訓門人九

「門人への訓戒ではあるが、氏名のわからないものをこの巻にまとめた。」

「總訓門人而無名氏者爲此卷。」

【二二二・一】

いきなり先生に教えを請おうとする者がいると、先生は常に言われた。

朱子「もしここに来ようとするのであれば、まず私の解釈した書を読んでからにしてください。」〔王過〕

朋友乍見先生者、先生毎曰「若要來此、先看熹所解書也。」〔過〕

【一二一・2】

世昌（彭興宗）「先生が人に教えられる際、何か旨とするものがおありですか。」

朱子「私にそんなものはない。いつも学ぶ者にそれぞれの力量に応じて読書をさせているだけだ。」

〔陳文蔚〕

世昌（1）問「先生教人、有何宗旨。」曰「某無宗旨、尋常只是教學者隨分讀書。」〔文蔚〕

（1）世昌 彭興宗。字は世昌。陸九淵の門人で、九淵の死後象山精舎を守る。『資料索引』二九五八頁。

『学案』卷七七。

【一二一・3】

朱子「読書は暗唱してこそ精密で熟したものになる。いま覚えることもできず、説明することもできず、（読んだものが）心の中にあるような状態であるのは、すべて精密でなく熟していないことの弊害だ。もし正しい意味を理解していて、さらに全部覚えているのであれば、それに越したことはない。しかし、文章の意味が理解できず、暗唱できるだけとしても、そのうち知らず知らずのうちに、自然に（覚えていくことが）触発し合って正しい意味が分かるようになる。つまり、ある一節が心の中になれば、おのずと気になって、理解せずにはいられないというわけだ。理解もできず、覚えてもいなくて、何が読書だ。横渠（張載）は「読書は暗唱しなければならない」と言っている。今の人が昔の人になかなわらない理由は、ただこのわずかな違いにある。昔の人は覚えたから理解できたのだ。今の人はいい加減で覚えることができないから、理解することもできない。重要などころも、そうでないところも、すべて暗唱すれば自然に理解できるのだ。いま学ぶ者がすでに全体の主旨を理解していて、数カ所分りにくいところが上手く解釈できないというだけならば、私がここで少し説明をして背中を押せば、自然に理解できるようになるだろう。ところが君たちときたら、まったく何も理解していないのだから、たとえ私が言葉を費やして説明したとしても、何の益もない。他でもない、ただ熟読するだけだ。他に方法はないのだ。」

「黄卓」「沈憫の記録は省略。」

讀書須是成誦、方精熟。今所以記不得、說不去、心下若存若亡、皆是不精不熟之患。若曉得義理、又皆記得、固是好。若曉文義不得、只背得、少間不知不覺、自然相觸發、曉得這義理、蓋這一段文義橫在心下、

自是放不得、必曉而後已。若曉不得、又記不得、更不消讀書矣。橫渠說（校1）讀書須是成誦（1）。今人所以不如古人處、只爭這些子。古人記得、故曉得。今人鹵莽記不得、故曉不得。緊要處、慢處、皆須成誦、自然曉得也。今學者若已曉得大義、但有一兩處阻礙說不去、某這裏略些數句發（校2）動、自然曉得。今諸公盡不會曉得、縱某多言何益。無他、只要熟看熟讀而已、別無方法也。〔卓〕〔欄略〕

（校1）正中書局本・朝鮮整版は「說」を「云」に作る。

（校2）正中書局本・朝鮮整版は「發」を「撥」に作る。

（1）橫渠說讀書須是成誦 『經學理窟』義理（理學叢書『張載集』二七五頁）。「讀書少則無由考校得義精、蓋書以維持此心、一時放下則一時德性有懈、讀書則此心常在、不讀書則終看義理不見。書須成誦精思、多在夜中或靜坐得之、不記則思不起、但通貫得大原後、書亦易記。所以觀書者、釋己之疑、明己之未達、每見每知所益、則學進矣、於不疑處有疑、方是進矣」。

【一二一・4】

ある學生が文章を暗記できないことを悩んでいた。

朱子「熟していないだけだ。心に染み入るまでじっくり味わったことがなく、ただ書物の中の言葉を守っているだけだから、書物を見ている時には覚えていても、書物を手放せばすぐに忘れてしまうのだ。もし自

分が本当に書物に書かれていたことの意味を理解していれば、どうして忘れることがありえよう。例えば、誰かが生姜を持って来れば、辛からいということが分かるが、砂糖を持って来て（それを人が辛からいと言つても、辛からいとは信じまい。」

【程端蒙】

一學者患記文字不起。先生曰「只是不熟。不會玩味入心、但守得冊子上言語、所以見冊子時記得、纔放下便忘了。若使自家實得他那意思、如何會忘。譬如人將一塊生薑來、須知道是辣（1）。若將一塊砂糖來、便不信是辣。」

【端蒙】

（1）人將一塊生薑來、須知道是辣 卷五・67条（九二頁）「如舉天下説生薑辣、待我喫得真箇辣、方敢信」。

【二二・5】

ある士友に言われた。

朱子「以前もらった書簡に、「読書は精密に熟する必要はない」だの、「熟考してはならない」だのとあった。読書はまさに精密に熟することが必要であるのに、その必要はないと言い、学問はまさに熟考しなればならないのに、熟考してはならないと言う。この二つが君の心の中で病根となっているのだ。ちょうど

人が冷たいものを食べてそれが脾臓と胃臓のところであつてしまひ、十數年それが身体の害となつてゐるようなものだ。十年ぶりに会つても相変わらずそんなふうであるのは、病根が除かれていないからだ。」

〔襲蓋卿〕

謂一士友曰（校1）「向嘗收書云、讀書不用精熟。又云、不要思惟。讀書正要精熟、而言不用精熟。學問正要思惟、而言不可思惟、只爲此兩句在胸中做病根。正如人食冷物留於脾胃之間、十數年爲害。所以與吾友相別十年只如此者、病根不除也。」

〔蓋卿〕

（校1）底本・和刻本・楠本本は「日」に作るが、正中書局本・朝鮮整版に拠り「日」に改めた。

（155条担当 戸丸凌太）

【二二・6】

朱子「以前に老蘇（蘇洵）が讀書を語つた言葉を読んだことがある。曰く『孟子』や『論語』、韓子（愈）やその他の聖人の文章を、静かに姿勢を正して終日読むこと七、八年。当初は、内に分け入つては（その奥深さに）呆然とし、外を概観しては（その幅広さに）驚嘆するばかりであつた。久しく続けるうちに、だんだん精密に読めるようになり、胸中が広々と明るくなって、人として語るべき言葉というのはこのようであつた。」

なければならぬということがわかったが、自分からは取立て言葉にはしなかった。時が経つにつれ、胸中に積もった言葉が日増しに多くなり、自ら止めることができなくなり、試みにそれを書き出してみた。その後何度もそれを読んでみたが、水が湧き出るように自然に言葉が湧き出てくるように感じた。また韓退之（愈）の「答李翊」や柳子厚（宗元）の「答韋中立書」も読書の方法を述べており、見るべきものである。私はかつて溜め息をつきながら思ったのだが、この人たちがただ言葉や韻の巧みさを求めることばかりにこれだけ多くの労力を払い、多くの精力を費やしたのは、なんとも惜しいことだ。

いま道理を理解しようとするのは、天下第一の至難のことだ。それなのに、十日やひと月の時間を費やして一巻の書を熟読するということもせず、ただ漫然と問いを発し、その場その場であれこれ言葉を寄せ集め、本文すらろくに覚えておらず、質問するにもその一段の文脈を覚えていない始末。何か言えるとしても、自分の考えを押し広げてこじつけているだけで、聖人の言葉とまったく関係していない。それで何になるというのか。いま君たちに願うのは、家に帰って襟を正してきちんと坐り、『大学』『論語』『中庸』『孟子』を手にとって、一句一字ごとにそれぞれ正確に理解し、聖賢の意を求めて、我が身に引きつけて考察をし、己のものとして実践し、虚心に実感できるまで追究することだ。そうやって二、三年経ってはじめて、師を求め是非確かめてこそ、話になるといふものだし、議論できるといふものだ。これこそ（『論語』にいう）「有道に就きて正す（道義を身につけた人に従って己の過ちを正していく）」というものだ。正しい学問の道に入るための方法とは、我が身を道理の中に浸して、徐々に親しませ、時間をかけて（道理と）己とを一つとすることなのだ。それなのに、今の人は道理はここ、自分は外という具合に、まったく関連させていな

嘗見老蘇說他讀書（1）、孟子論語韓子及其他聖人之文、兀然端坐、終日以讀者七八年。方其始也、入其中而惶然、博觀於其外而駭然以驚。及其久也、讀之益精、而其胸中豁然以明、若人之言固當然者、猶未敢自出其言也。時既久、胸中之言日益多、不能自制、試出而書之、已而再三讀之、渾渾乎覺其來之易矣（2）。又韓退之答李翊（3）、柳子厚答韋中立書（4）、言讀書用功之法、亦可見。某嘗歎息、以爲此數人者、但求文字言語聲響之工、用了許多功夫、費了許多精力、甚可惜也。今欲理會這箇道理、是天下第一至大至難之事。乃不會用得旬月功夫熟讀得一卷書、只是泛然發問、臨時湊合、元不會記得本文、及至問著、元不會記得一段首尾、其能言者、不過敷演已說、與聖人言語初不相干、是濟甚事。今請歸家正襟危坐、取大學論語中庸孟子、逐句逐字分曉精切、求聖賢之意、切己體察、著己踐履、虚心體究。如是兩三年、然後方去尋師證（校1）其是非、方有可商量、有可議論、方是就有道而正焉（5）者。入道之門、是將自家身己入那道理中去、漸漸相親、久之與己爲一。而今人道理在這裏、自家身在外面、全不會相干涉。

（校1）朝鮮整版は「證」を「訂」に作る。

※本条の前半部分と次の二条は類似している。記録者はいずれも沈僩。

卷十・65条（一七〇頁）「……老蘇只取孟子論語韓子與諸聖人之書、安坐而讀之者七八年、後來做出許多文字如此好。他資質固不可及、然亦須著如此讀。只是他讀時、便只要模寫他言語、做文章。若移此心與這樣

資質去講究義理、那裏得來。是知書只貴熟讀、別無方法」。

卷一〇四・45條（二六二二頁）「……如韓文公答李翊一書、與老蘇上歐陽公書、他直如此用工夫。未有苟然而成者。歐陽公則就作文上改換、只管揩磨、逐旋捱將去、久之、漸漸揩磨得光。老蘇則直是心中都透熟了、方出之於書。看他們用工夫更難、可惜。若移之於此、大段可畏」。

(1) 嘗見老蘇說他讀書、 『文集』卷七四「滄洲精舍論學者」は蘇洵の言葉から始まり、修養の方法に至るまで本条と類似している。

(2) 孟子論語韓子及其他聖人之文、其來之易矣。蘇洵『嘉祐集』卷十二「上歐陽內翰」第一書「取論語孟子韓子及其他聖人賢人之文、而兀然端坐、終日以讀之者七八年。方其始也、入其中而惶然、博觀於其外而駭然以驚。及其久也、讀之益精、而其胸中豁然以明、若人之言固當然者、然猶未敢自出其言也。時既久、胸中之言日益多、不能自制、試出而書之、已而再三讀之、渾渾乎覺其來之易矣」。

(3) 韓退之答李翊。韓愈『昌黎集』卷十六「答李翊」「識古書之正偽、與雖正而不至焉者、昭昭然白黑分矣。而務去之、乃徐有得也。當其取於心而注於手也、汨汨然來矣」。

(4) 柳子厚答韋中立書。柳宗元『柳河東集』卷三四「答韋中立書」「本之書以求其質、本之詩以求其恒、本之禮以求其宜、本之春秋以求其斷、本之易以求其動、此吾所以取道之原也。參之穀梁氏以厲其氣、參之孟荀以暢其支、參之莊老以肆其端、參之國語以博其趣、參之離騷以致其幽、參之太史公以著其潔、此吾所以旁推交通而以爲之文也」。

(5) 就有道而正焉。『論語』学而「子曰、君子食無求飽、居無求安、敏於事而慎於言、就有道而正焉、

可謂好學也已」。

【一二一・七】

そこで仏教に言及されて言われた。

朱子「僧侶の心はむしろ意識されている。もし良い寺院で、良い師が得られれば、彼らは朝夕ひたすら汲と修業に励むだろうから、得るものがないはずはない。いま君たちは学問の道にありながら、その心は彼らのような（汲々と励む）心たり得ているだろうか。それは、（君たちが）心をまったく意識せず、日々気ままに適当に過ごし、まるで家の無い（根本とするとところを欠いた）人のようだからだ。ある道理を考えても分からなければ、すぐに片隅に放り出して見向きもせず、三日五日経っても改めて取り上げることもしせず、毎日ただのんびりと過ごして、無駄話をしては外の物を追いかけているばかりだ。敢えて言うが、君たちは一日として心があるべきところがない。一日どころか、一時もなく、一時どころか、瞬間にすらない。のんびりふらふら、何かをしているようで何もしておらず、生まれてから死ぬまで、ぼんやりとして何も得ないままだ。いま我々の仲間に謹厳で誤ったことをしない者がいたとしても、それはその人の資質が元来そうであつたからに過ぎず、心を意識したことはなく、漫然と日々を過ごしているだけなのだ。」

ある人「汲汲としなければいけないのですね。」

朱子「君はただ口で汲汲とすと言うだけで、まったく汲汲としていない。汲汲と修養している人は、自

然とちがつてくるはずだ。そういう人はどうして無駄話をするかを考えようか。何事にも集中して丁寧にしない、一時一瞬も漫然とすることがないはずだ。一つの道理を考えるならば、徹底的に熟するまで考えて、ほんの少しも尽さないところが無いというふうでなければいけない。いま君たちは何か一つの道理を考えても、中途半端なところで投げ出してしまい、しばらくするとまた別の何かを考え始めるが、それも理解できなかつたら、また放り出して、また別の何かを考えようとする。そんなふうでは、死ぬまで何もできはしない。もし本当にある一つの道理を徹底して理解したならば、それを入り口にして他の道理にまで押しひろげていけば、他の道理も同じだということが分かるはずだ。君たちはその入り口に入らず、毎日ただ入り口の外をうろろしているばかりだ。入りどころがないから、何もできないのだ。」

「朱子「もし大きなところから入れないのであれば、小さなところから入り、東から入れないのであれば、西から入るのだ。いったん入ってしまったのならば、触れるものみな同じ道理なのだ。いま君たちはあれこれやってはいるが、一つのことを徹底して理解していないから、東でうろろ西でうろろ、入り口一つ見つけられないのだ。」

朱子「学問の修養は、発奮して常に気を抜かないようにし、まるで何か失ったものがあつて嘆くように、それを取り戻すまではやめないとしようでなければならぬ。もし自分が一つの大きな光り輝く宝石を持つていて、それを人に盗まれたとしたら、君の心はどうしてそれを諦めることができるだろうか。きつと追いかけて、取りもどさずにはいられないと思うはずだ。学問の修養というものも同じようではない。」

〔沈備〕

因言及釋氏、而曰「釋子之心却有用途。若是好叢林、得一好長老、他直是朝夕汲汲不捨、所以無有不得之理。今公等學道、此心安得似他。是此心元不會有所用、逐日流蕩放逐、如無家之人。思量一件道理不透、便颺去、豈掉放一壁、不能管得、三日五日不知拈起、每日只是悠悠度日、說閑話逐物而已。敢說（1）公等無一日心在此上。莫說一日、一時也無、莫說一時、頃刻也無。悠悠漾漾、似做不做、從生至死、忽然無得而已。今朋友有謹飭不妄作者、亦是他資稟自如此。然其心亦無所用、只是閑慢過日。」或云「須是汲汲。」曰「公只會說汲汲、元不會汲汲。若是汲汲用功底人、自別。他那得工夫說閑話。精專懇切、無一時一息不在裏許。思量一件道理、直是思量得徹底透熟、無一毫（校1）不盡。今公等思量這一件道理、思量到半間不界（2）、便掉了、少間又看那一件、那件看不得、又掉了、又看那一件。如此沒世不濟事。若真箇看得這一件道理透、入得這箇門路、以之推他道理、也只一般。只是公等不會通得這箇門路、每日只是在門外走、所以都無入頭處、都不濟事。」又曰「若是大處入不得、便從小處入、東邊入不得、便從西邊入。及至入得了、觸處皆是此理。今公等千頭萬緒、不會理會得一箇透徹、所以東解西模、便（校2）無一箇入頭處。」又曰「學道做工夫（3）、須是奮厲警發、悵然如有所失、不尋得則不休。如自家有一大光明寶藏、被人偷將去、此心還肯放捨否。定是去追捕尋捉得了、方休。做工夫亦須如此。」

〔欄〕

（校1）正中書局本是「毫」を「豪」に作る。

（校2）正中書局本は「便」を「更」に作る。

※次に掲げる卷一・四・五条（二七五四頁、記録者なし）は、本条の要約になっている。同一場面の別記録か。

因説僧家有規矩嚴整、士人却不循禮、曰「他却是心有用處。今士人雖有好底、不肯爲非、亦是他資質偶然如此。要之、其心實無所用、每日閑慢時多。如欲理會道理、理會不得、便掉過三五日半月日不當事、鑽不透便休了。既是來這一門、鑽不透、又須別尋一門。不從大處入、須從小處入、不從東邊入、便從西邊入、及其入得、却只是一般。今頭頭處處鑽不透、便休了。如此、則無說矣。有理會不得處、須是皇皇汲汲然、無有理會不得者。譬如人有大寶珠、失了、不著緊尋、如何會得。」

（1）敢説す 以下の部分と次に掲げる卷一・四・八条（二七五五頁）は部分的に類似している。「……敢説公們無一日心在上面。莫説一日、便十日心也不在。莫説十日、便是數月心也不在。莫説數月、便是整年心也不在……」。記録者は本条と同じく沈憫。

（2）半間不界 中途半端な。卷三四・139条（八八八頁）「聖人之爲人、自有不可及處、直要做到底、不做箇半間不界底人」。

（3）學道做工夫す 以下の部分と卷一・二一・15条（二九三三頁）は部分的に類似している。15条参照。記録者は本条と同じく沈憫。

（6）7条担当 村田岳

朱子「諸君は私の話を聞きにやって来たわけだが、私が話すことは聖賢が既に述べた言葉の範囲を超えるものではない。とはいえ漫然と聞いているだけでは何の役にも立たない。すぐさま実際に努めようとしなければいけない。近頃思うのだが、学ぶ者が取っかかりを見つけられず右往左往しているのは、聖賢が多くのことを述べているので、これもやろうあれもやろうとしてしまうからなのだろう。たとえば昨夜話した『易』の「敬以て内を直にし、義以て外を方にす」も、実際にこのことに取り組んでみて、真に（程頤のいうように）「敬が立てば内が直になり、義が表れ出て外が方正になる」ことがわかってこそ、生涯にわたって実践するに価するものとなるのだ。今の人はこの兩句（敬以直内、義以方外）がよいとわかってても、『論語』の「己に克ちて礼に復す」の話を聞くと、それもまたよいと思ひ、『論語』の「門を出でては大賓に見えるが如し」の話を聞くと、それもよいと思う。こうして徒らに（気になることが）多くなると、結局一つのこともしつかりと捉えられなくなってしまうのだ。」

〔葉賀孫〕

諸公來聽說話、某所說亦不出聖賢之言。然徒聽之、亦不濟事、須是便去下工夫、始得。近覺（校一）得學者所以不成頭項（一）者、只緣聖賢說得多了、既欲爲此、又欲爲彼。如夜來說、敬以直内、義以方外（二）。若實下工夫、見得真箇是敬立則内直、義形而外方（三）、這終身可以受用。今人却似見得這兩句好、又見說克己復禮（四）也好、又見說出門如見大賓（五）也好。空多了、少間却不把捉得一項周全。〔賀孫〕

(校1) 楠本本は「覺」を「學」に作る。

※楠本本は本条を卷十三「力行」(二四九頁)にも収録している。

(1) 不成頭項 「頭項」は項目や端緒の意。「不成頭項」は、筋道立っていないこと。どこから手を付けてよいかわからず、混乱していること。卷十二・141条(二二七頁)「不要因一事而惹出三件兩件。如此則雜然無頭項、何以得他專一」、卷六四・170条(一五九四頁)「人若是理會得那源頭、只是這一箇物事。許多頭項都有歸著、如天下雨、一點一點都著在地上」。

(2) 敬以直内、義以方外 『周易』坤卦・文言伝「君子敬以直内、義以方外。敬義立而徳不孤」。

(3) 敬立則内直、義形而外方 『周易程氏易伝』「敬立而内直、義形而外方。義形於外、非在外也」。

(4) 克己復禮 『論語』顔淵「顔淵問仁。子曰、克己復禮爲仁。一日克己復禮、天下歸仁焉。爲仁由己、而由人乎哉」。

(5) 出門如見大賓 『論語』顔淵「仲弓問仁。子曰、出門如見大賓、使民如承大祭。己所不欲、勿施於人。在邦無怨、在家無怨」。

【二一〇・九】

朱子「今の学ぶ者が書物を読む場合、自説を立てる必要はなく、過去の賢人たちや諸家の説を記憶できればそれで十分だ。いま自分がどう説明してみようとも、結局のところ過去の賢人たちの説を超え出することは

ない。諸家の説をことごとく覚えてこそ、基礎となるものができ、正しい道理の基盤も牢固になり、この心も定まるようになる。心をその道筋に定めて進めば、いつしか自然に理解がすつきりして熟してくる。いま諸君が書物を読む際、大概はみな熟していないという欠点がある。それゆえ説明してみてもすつきりしないのだ。なんでもかんでも寄せ集めていい加減に概括するだけで、もとより何も実際にわかっていない。

私はかつて非常に苦勞して書物を読み、諸家の説をことごとく覚えた。たとえば『詩経』など、以前は今のようにならざらと説明することができなかった。古今の諸家の説を暗記して、何もない時にそれらを思い起こして考えたのだ。この人のこの字の説は正しいが、あの字については間違っている、あの人のこの字の説は間違っているが、あの字については正しい、この人は全て正しく、あの人は全て間違っている、正しいとする根拠は何か、間違っているとする根拠は何か。このようにひたすら考えていけば、そのうち正しい道理というものが自然に心のなかで光り輝いてはつきりとしてくる。いま君たちは牽強附会して説明しようとするだけで、記憶が熟しておらず、それゆえ道理をとらえられていない。自分も道理をしっかり捉まえられないし、道理も自分のいうことをきかない。しばらく一つところに集まっても、すぐに散らばってしまうのは、熟していないからに他ならない。道理というものは、古の聖賢もこのように語り、今の人もこのように語るもので、だいたい同じようなことを言うものなのだ。とは言え、今の人の説が結局のところそれらしくない（古の聖賢のようでない）のは、熟か不熟かという違いにある。たとえ十分に古の聖賢と同じように言えたとしても、それでもなお似ていないところが残る。まして十分に聖賢のように語れる者などお目にかかったことがない。」

敬子（李燔）「今は毎日ゆったり穩やかに取り組んでおりますが、いつもより余分に何度も目を通したり音読したりすることで、自分の心が違ってきたように感じます。」

朱子「今からゆったり穩やかにして何になる、今はまだ苦しんで力を尽くして努めてこそよいのだ。ゆったり穩やかというのは、八割九割方でき上がってこそできることで、今のうちからゆったり穩やかななどと言うのは、浮ついているにすぎない。学問修養というものは、大きな火の中に放りこんで鍛錬するようなもので、真つ赤になつて溶け出したものを型に流し込んで地金にするようになければならない。それをいま、ちよつと火にかざして焼くだけでは、まったく生焼けで、自分が自由に使えるものにはなっていない。それで何ができると言うのか。必ず（熱して溶けた鉄のように）縦にも横にも自在に伸ばしたり固めたり自分が使えるようにしてこそ、こねて丸くしたり、押して平たくしたり、放り投げたり、受け止めたりできるようなのであるであつて、そうであつてこそよいのだ。私は常々思うのだが、今の学ぶ者たちが力をつけられず、何事も成し得ない原因は、熟していないということに他ならない。日ごろから多くの労力を費やして読書をしているのに結局何の力もつけられないのは、まさに熟していないからなのだ。熟していないがゆえに、ついには一つの事すら精確に理解できなくなるのだ。呂居仁（本中）の記録によれば、老蘇（洵）は平生「一升まずで転じ、一斗まずで量る」という言葉を聞いて、作文の妙所を悟つたと述べたという。ドロドロに熟成させて、縦横自在に自分で使えるようであつてこそ、事を成し遂げられるのだ。」

〔沈備〕

「今學者看文字、不必自立說、只記得前賢與諸家說、便得。而今看自家如何說、終是不如前賢。須盡記得

諸家說、方有箇襯簾（1）處、這義理根脚方牢、這心也有殺泊（2）處。心路只在這上走、久久自然曉得透熟。今公輩看文字、大概都有箇生之病、所以說得來不透徹。只是去巴攬（3）包籠（4）他、元無實見處。某舊時看文字極難、諸家說盡用記。且如毛詩、那時未似如今說得如此條暢。古今諸家說、蓋用記取、閑時將起思量。這一家說得那字是、那字不是。那一家說得那字不是、那字是。那家說得全是、那家說得全非。所以是者是如何、所以非者是如何。只管思量、少間這正當道理、自然光明燦爛在心目間、如指諸掌。今公們只是扭（校1）捏（5）巴攬來說、都記得不熟、所以這道理收拾他不住、自家也使他不動、他也不服自家使。相聚得一朝半日、又散去了、只是不熟。這箇道理、古時聖賢也如此說、今人也如此說、說得大概一般。然今人說終是不似、所爭者只是熟與不熟耳。縱使說得十分全似、猶不似在、何況和那十分似底也不會看得出。」敬子云「而今每日只是優游和緩、分外看得幾遍、分外讀得幾遍、意思便覺得不同。」曰「而今使（校2）未得優游和緩、須是苦心竭力下工夫方得。那箇優游和緩、須是做得分八九分成了、方使得優游和緩。而今便說優游和緩、只是泛泛而已矣。這箇做工夫、須是放大火中鍛煉、鍛教他通紅、溶成汁、瀉成錠、方得。今只是（校3）略略火面上燻得透、全然生硬、不屬自家使在、濟得甚事。須是縱橫舒卷皆由自家使得、方好搦成團、捺成匾、放得去、收得來、方可。某嘗思、今之學者所以多不得力、不濟事者、只是不熟。平生也費許多功夫看文字、下梢頭都不得力者、正緣不熟耳。只緣一箇不熟、少間無一件事理會得精。呂居仁（6）記老蘇說平生因聞升裏轉、斗裏量（7）之語、遂悟作文章妙處。這箇須是爛泥醬熟、縱橫妙用皆由自家、方濟得事也。」

(校1) 正中書局本・朝鮮整版・和刻本・楠本本は「扭」を「紐」に作る。

(校2) 正中書局本・朝鮮整版・和刻本・楠本本は「便」を「使」に作る。

(校3) 楠本本は「只是」の字を欠く。

(1) 襯篋 補い支える意。「篋」はむしろ。「襯」は裏地などの布をあてて補強すること。卷一一八・49条(二八五〇頁)「須是理會得多、方始襯篋得起」、卷一三七・17条(三二五五頁)「只是空見得箇本原如此、下面工夫都空疏、更無物事撐住襯篋、所以於用處不甚可人意」。

(2) 殺泊 とどまること。「殺」は停止の意。

(3) 巴攬 何でもかんでも寄せ集めること。手を伸ばして引き寄せる、何かに頼る、手掛かりにすることも指す。卷九七・57条(二四九二頁)「人於敬上未有用力處、且自思入、庶幾有箇巴攬處。思之一字、於學者最有力」。

(4) 包籠 いい加減に概括すること。卷八〇・73条(二〇八六頁)「今公讀詩、只是將已意去包籠他、如做時文相似。中間委曲周旋之意、盡不會理會得、濟得甚事」、卷一三九・106条(三三一九頁)「今東坡之言曰、吾所謂文、必與道俱。則是文自文而道自道、待作文時、旋去討箇道來入放裏面、此是它大病處。只是它每常文字華妙、包籠將去、到此不覺漏逗」。

(5) 扭捏 牽強付会する、こじつける、知ったかぶりをする。卷一一六・47条(二八〇三頁)「此間說時、旋扭捏湊合、說得些小、才過了又便忘了。或他日被人問起、又遂旋扭捏說得些小、過了又忘記了」、卷一一八・89条(二八六二頁)「大凡自家見得都是、也且做一半是、留取一半且做未是。萬一果是、終

久不會變著。萬一未是，將久浹洽，自然貫通。不可才有所見，便就上面扭捏」。

(6) 呂居仁 呂本中、字は居仁。張鎡『仕學規範』卷三四に「呂居仁云、老蘇嘗自言、升裏轉斗裏量、因聞此、遂悟文章妙處」とある。同書には呂本中『呂氏童蒙訓』からの引用とあるが、現行の『童蒙訓』には見えない。

(7) 升裏轉、斗裏量 未詳。当時の俗語と考えられるが、特に「転」の字義不明。徐時儀『朱子語類』詞彙研究』(上海古籍出版社、二〇一三)は「比喻做事因地制宜、無論大小場合、都能得心应手、游刃有余」とする(三二六頁)。また、賀貽孫『詩筏』に「昔人論文云、貴在升里能轉、斗里能量」とあることを指摘している。

(8) 9条担当 宮下 和大)

【二二一・10】

朱子「私は諸君に言いたいことが山ほどあるのだが、まだその段階ではないと感じている。いま目の前のちよつとした文章の意味すら充分に理解できていないのに、どうしてそれ以上のこと可言えようか。物事というものは、四方上下、大小本末、すべて一つのことに関われているから、一貫して取り組まなければならない。この心を常に意識して保持するといった実践は、もちろん緊要であり、どんなときでも間断があつてはならないのだが、道理の根本についても、もちろん考えなければならぬ。微妙で込み入った細かいこ

とも理解しなければならぬし、制度や文飾も理解しなければならぬし、古今の治乱も理解しなければならぬ。事の精粗大小にかかわらず、理解しようと取り組まなくていいことなどない。そうしてすべての面が一つに合わさると、学問修養に遺漏がなくなるのだ。東で分からないことも西で分かり、ここで分からないこともあつちで分かるはずであつて、一箇所が分かれば、その他のところも類推できる。それなのに、いまだ一つのところから攻めるのにも力を尽さないでいて、いったい何ができようか。（例えば戦術において）ある土地に本陣を定めるとしても、他の支部隊も広く配置しておかなければなるまい。大軍同士が殺し合うときも同じで、大軍がある地に駐屯してその地を鎮圧したとしても、遊撃部隊は依然として別のところ
で応戦しているものだ。学問修養も、このようではなければならない。

それなのにいま諸君ときては、のんびり悠長に構えて、一方面の道だけをじつと守つて、通り一遍に表面を撫でるばかり、今日はちよつと行つて何かにぶつかればすぐに退散し、明日もまた同じことの繰り返しだ。痒いところすら搔けていないのだから、まして痛いところ（我が身に痛切なところ）に手が届くことなど望むべくもない。そんなふうだから五年十年同じ調子で、全くもつて進歩が見られない。こういったことは勇敢に奮戦して、振り返ることなく真つ直ぐ前に進んで行つて、四方上下一斉に取り組んでこそ、はじめて次の段階への取つ掛かりが見えてくるものだ。

孔子のいう「仁遠からんや。我仁を欲すれば、斯に仁至る（仁は遠いものだろうか。自分が仁を求めれば、仁はすぐやってくる）」とは、人にすべて自分からやろうとするよう教えたものだ。また『孟子』に出てくる奕秋の話も、まさにこの違いであつて、一人は進んで学ぼうとし、もう一人は大したことを見なしていな

かつたということだ。私は八、九歳の頃、『孟子』のこの部分を読むといつも心から奮い立ったものだ。學問とはこのように努めるべきものかと思つたのだ。そういうことは初めからわかつていたつもりであつたが、碁はどのように打つものなのか、そこにどのような修養があるのか知らなかつたのだ。その後、なおいつそ弛むことなくひたすら何事においても努力するようになった。ところが、今の學ぶ者には発奮するところが見えず、ただのんびり悠長に過ごすばかり、今日見ても明日見ても相変わらず同じ様子で少しも進歩しない。」

某煞（校1）有話要與諸公說、只是覺次序未到。而今只是面前小小文義尚如此理會不透、如何說得到其他事。這箇（校2）事、須是四方上下、小大本末、一齊貫穿在這裏、一齊理會過。其操存（1）踐履處、固是緊要、不可間斷。至於道理之大原（校3）、固要理會、纖悉委曲處也要理會、制度文爲處也要理會、古今治亂處也要理會、精粗大小、無不當理會。四邊一齊合起、功夫無些罅（校4）漏。東邊見不得、西邊須見得、這下見不得、那下須見得、既見得一處、則其他處亦可類推（校5）。而今只從一處去攻擊他、又不曾著力、濟得甚事。如坐定一箇地頭、而他支脚、也須分布擺陣（2）。如大軍廝殺相似、大軍在此坐以鎮之、游軍依舊去別處邀截、須如此作工夫方得。而今都只是悠悠、礙定這一路、略略拂過、今日走來挨一挨、又退去、明日亦是如此。都不曾抓著那痒（校6）處、何況更望掐著痛處。所以五年十年只是恁地、全不見長進。這箇須是勇猛奮厲、直前不顧去做、四方上一齊著到、方有箇入頭。孔子曰、仁遠乎哉。我欲仁、斯仁至矣（3）。這箇全要人自去做。孟子所謂奕秋（4）、只是爭這些子、一箇進前要做、一箇不把當事。某八九歲時讀孟子

到此、未嘗不慨然奮發、以爲爲學須如此做工夫。當初便有這箇意思如此、只是未知得那甚是如何著、是如何做工夫。自後更不肯休、一向要去做工夫。今學者不見有奮發底意思、只是如此悠悠地過、今日見他是如此、明日見他亦是如此。

(校1) 楠本本は「斃」を「殺」に作る。

(校2) 和刻本は「箇」を「他」に作る。

(校3) 楠本本は「道理之大原」を「踐履大原」に作る。

(校4) 楠本本は「罇」を「省」に作る。

(校5) 楠本本は「推」を「權」に作る。

(校6) 楠本本は「痒」を「庠」に作る。

(1) 操存 『孟子』告子上「孔子曰、操則存、舍則亡。出入無時、莫知其鄉、惟心之謂與」。

(2) 擺陣 陣立てする。配置編成する。

(3) 仁遠乎哉。我欲仁、斯仁至矣 『論語』述而。

(4) 孟子所謂奕秋 『孟子』告子上「今夫弈之爲數、小數也。不專心致志、則不得也。弈秋、通國之善

弈者也。使弈秋誨二人弈、其一人專心致志、惟弈秋之爲聽。一人雖聽之、一心以爲有鴻鵠將至。思援弓繳而射之。雖與之俱學、弗若之矣。爲是其智弗若與。曰、非然也」。

建陽の士人がやって来て教えを乞うた折、先生が言われた。

朱子「君たちはそんなふうに学問をして、大いに歳月を無駄にしまっている。今年も去年と変わらず、昨日も今日と変わらず、まったくもって志大きく張り切ってやってやろうという気概が見受けられない。物事は徹底的に理解して、一日千里の速さでどんどん先に進んでいかなければならないのだ。いまだ漫然と上っ面だけで取り組み、痒いところに手が届かないようでは、いったい何ができるといえるのか。学問修養というものは、ちょうど井戸を掘るようなもので、水源に到達したならば、自然と水が流れ出て止まることはない。今の君たちは、まったく乾燥した状態だ。それは心ここに在らずだからで、何をすることもしていないからに他ならない。今日は出かけるから修養はできないなどどうして言うのか。いつも言っているが、出かけた道すがらこそまさに修養のしどころなのだ。十里も外に出かければ、家の雑事に悩まされることもないし、客人の相手をする必要もなく、まさに気持ちを集まらせて道理を考えるのに最適だ。だから、学問は『論語』にいうように、「時習（機会あるたびに学ぶこと）」を貴ぶのであり、「時習」すれば自然と「説」ぶようになるのだ。いま君たちは「時習」以前の段階で、物事が見えてはじめて「時習」もできるのだ。いま何も見えないのは、心が込められていないからで、だから窓辺で（机に向かつて）読書をしていても、立ち上がった途端にすべて忘れてしまうのだ。いつも心の中で書物に書かれていたことを考えていれば、たとえ細かい注釈の字句を覚えていなくとも、折に触れて経書の本文を思い出しければ、また違って

くるはずだ。君たちはいま上つ面に取り組むだけで、痒いところをまったく搔けていない。物事の理解が熟した時には、やがて自然に動揺しなくなる。自分の脚を少しでも動かせば、自然にその物事を着実に踏みしめて行けるようになる。」

朱子「道理を心の内に入れて忘れないようにし、その後で折に触れて義理（正しい道理）を注ぎこむようにして涵養しなさい。いまの君たちは種を地面に置いて土の中に埋めずにいるのも同じ、まったく土の気に触れていないようなものだ。」

因建陽士人來請問、先生曰「公們如此做工夫、大故費日子。覺得今年只似去年、前日只是今日、都無昌大發越底意思。這物事須教看得精透後、一日千里始得。而今都只泛泛在那皮毛上理會、都不會抓著那痒處、濟得甚事。做工夫一似穿井相似、穿到水處、自然流出來不住、而今都乾燥、只是心不在、不會著心。如何說道出去一日、便不會做得工夫。某常說、正是出去路上好做工夫。且如出十里外、既無家事妙、又無應接人客、正好提撕思量道理。所以學貴時習、到時習、自然說也（1）。如今不敢說時習、須看得見那物事方能時習。如今都看不見、只是不會入心、所以在窗下看、才起去便都忘了。須是心心念念在上、便記不得細注字、也須時時提起經正文在心、也爭事（2）。而今都只在那皮毛上理會、盡不會抓著痒處。若看得那物事熟時、少間自轉動不得（3）。自家脚才動、自然踏著那物事行。」又云「須是得這道理入心不忘了、然後時時以義理澆灌之。而今這種子只在地面上、不會入地裏去、都不曾與土氣相接著。」

(1) 學貴時習、到時習、自然說也 『論語』学而「子曰、學而時習之、不亦說乎」。

(2) 爭事 差がある。違いがある、同じではない。卷七八・34条(二九八五頁)「某嘗疑孔安國書是假書。比毛公詩如此高簡、大段爭事。漢儒訓釋文字、多是如此、有疑則闕」、卷二一〇・79条(二九〇五頁)「但長長照管得那心便了。人若能提掇得此心在時、煞爭事」。

(3) 轉動不得 卷一一四・39条(二七六六頁)「公看道理、失之太寬。譬如小物而用大籠罩、終有轉動」。

(10) 口条担当 石山 裕規

【二二一・12】

学ぶ者がのんびり悠長にしているのは大きな問題だ。いま君たちはみな一寸進んで一尺(十寸)退くといった具合で、毎日わずかな字句の意味に取り組むものの、どれもさっと撫でるだけで、表面的なことも理解できていない。道理というものは規模が大きく、範囲が広いので、あらゆる方面から包括的に考えてこそ、漏れが無くなる。それなのにいま君たちは、一方面から向かっていくだけで、しかもそこに十分力を尽くさないのだから、どうして道理を理解することができようか。例えば、『論語』の中の(曾点と漆雕開に関する箇所ならば、漆雕開のことについては言及が少ないから理解するのが難しいが、曾点のことに關しては、彼が何を樂しむとしたのか、どのように樂しんだのか、詳細に読まなくてはならない。聖人(孔子)がそれを樂しむべきことだと言ったから、それを信じたということではないのだ。曾点はそもそもこの樂しむべき

ことを自分自身で悟ったからそう語ったのであって、他人の言葉の受け売りで言ったのではない。」

朱子「いま本来の心を保持しようとするならば、（雑念を）きれいさっぱり片付けてすっきりさせなければならぬ。文章を読むならば、意識を集中させて考え求めなければならぬ。物事に應對するのならば、何事も適切に処理しなければならぬ。あらゆる方面から取り組んでいけば、おのずとどこか一方面から通じるようになるものだ。」

朱子「例えば（軍隊が）戦場で殺し合っている時、（出撃の）鼓が鳴り響けば、前進する他なく、死ぬしかないと覚悟して、決して振り返らないというようであればならぬ（のと同じように、学問修養に取り組まなければならない）。」

〔胡泳〕

學者悠悠是大病。今覺諸公都是進寸退尺、每日理會些小文義、都輕輕地拂過、不會動得皮毛上。這箇道理規模大、體面闊、須是四面去包括、方無走處。今只從二面去、又不曾著力、如何可得。且如曾點漆雕開兩處、漆雕開事言語少（1）、難理會。曾點底（2）、須子細看他樂箇甚底。是如何地樂。不只是聖人說這箇事可樂、便信著。他原（校1）是自見得箇可樂底、依人口說不得。」又曰「而今持守、便打疊教淨潔。看文字、須著意思索。應接事物、都要是當。四面去討他、自有一面通處。」又曰「如見陳廝殺、播著鼓、只是向前去、有死無二、莫更回頭始得。」

〔胡泳〕

（校1）正中書局本・朝鮮整版は「原」を「須」に作る。

※本条と次に掲げる卷一一四・47条（二八〇三頁）の後半部分は、同一場面の別記録。記録者名なし。

李敬子曰「覺得已前都是如此悠悠過了。」曰「既知得悠悠、何不便莫要悠悠、便是覺意思都不會痛切。每日看文字、只是輕輕地拂過、寸進尺退、都不會依傍築、著那物事來。此間說時、旋扭湊合、說得些小、才過了又便忘了。或他日被人間起、又遂旋扭說得些小、過了又忘記了。如此濟得甚事。早間說如負痛相似。」因言「持敬如書所云若有疾、如此方謂之持敬。如人負一箇大痛、念念在此、日夜求所以去之之術。理會這一件物、須是徹頭徹尾、全文記得、始是如此、末是如此、中間是如此、如此謂之是、如此謂之非。須是理會教透徹、無些子疑滯、方得。若只是如此輕輕拂過、是濟甚事。如兩軍廝殺、兩邊播起鼓了、只得拚命進前、有死無二、方有箇生路、更不容放慢。若纔放慢、便被他殺了。」

（1）漆雕開事言語少 『論語』公治長「子使漆雕開仕。對曰、吾斯之未能信。子說」。『論語』の中で漆雕開への言及はこの箇所のみ。

（2）曾點底 『論語』先進「點爾何如。鼓瑟希。鏗爾、舍瑟而作。對曰、異乎三子者之撰。子曰、何傷乎。亦各言其志也。曰、莫春者、春服既成。冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、詠而歸。夫子喟然歎曰、吾與點也」。

【一一一・13】

或る人「家では（家事に追われ）せわしなく、読書を忘れたわけではありませんが、どうしても途切れ途

切れになってしまいます。」

朱子「それは志がないからに過ぎない。家の事と言うが、どうしてそんなものに自分を埋没させていてよかろう。いまま少しましな人であれば、きつとそこから脱却して、山中に一年か半年ばかり留まることだろう。そうすれば、どれだけ修養ができることか。そうするだけでも、土台を築くことができるのだ。そうしておけば時に物事に対処しても何の害にもならないし、ずっと物事に忙殺されているのと比べてどれほどましか。君と会うのは四、五年ぶりだが、相変わらずそのようにのんびり悠長にしている。人生にあといくつ四、五年があると思っているのだ。」

〔葉賀孫〕

或言「在家衮衮（1）、但不敢忘書冊、亦覺未免間斷。」曰「只是無志。若說家事、又如何汨沒（2）得自家。如今有稍高底人、也須會擺脫得過、山間坐一年半歲、是做得多少工夫。只恁地、也立得箇根脚。若時往應事、亦無害、較之一向在事務裏衮、是爭那裏去。公今三五年不相見、又只恁地悠悠、人生有幾箇三五年耶。」

〔賀孫〕

※次条（14条）と話題が似通っている。同一場面の別記録か。

（1）衮衮 絶え間なく、忙しく、あわただしく。卷十・38条（一六五頁）「讀書、只逐段逐些子細理會。小兒讀書所以記得、是渠不識後面字、只專讀一進耳。今人讀書、只衮衮讀去。假饒讀得十遍、是讀得十遍不曾理會得底書耳」。

(2) 汨没 埋没する、なくなる。卷九六・5条(二四六〇頁)「學者全體此心、只是全得此心、不爲私欲汨没、非是更有一心能體此心也」、卷十一・4条(二七六頁)「或只去事物中褻、則此心易得汨没」。

【二二一・14】

久しぶりに先生の元を訪れた者がいた。

朱子「一別以来、どんな書物を読んでいたのかね。」

ある人「學問をやめるつもりはありませんでしたが、家では雑事も多く、十分に取り組むことができかねました。」

朱子「君はまだ土台が出来ていないようだ。光陰惜しむべし。知らず知らずのうちに、三年や五年すぐに経ってしまうぞ。いま役人として任地に赴けば、役所の仕事はとりわけ繁多で、他の事をする余力がますます得にくくなってしまふ。人生においてあといくつ三年や五年があると思つていいのか。自分で頑張るようになさい。もし人里離れた静かな寺で、一、二年修養することができれば、土台が出来、そこから進めていくことができよう。そんなふうのんびり悠長にしている、どうして進歩できようか。」

〔輔広〕

或有來省先生者。曰「別後讀何書。」曰「雖不敢廢學、然家間事亦多、難得全功。」曰「覺得公今未有箇地頭(一)在、光陰可惜。不知不覺、便是三五年。如今又去赴官、官所事尤多、益難得餘力。人生能得幾箇

三五年。須是自強。若尋得箇僻靜寺院、做一兩年工夫、須尋得箇地頭、可以自上做將去。若似此悠悠、如何得進。」〔廣〕

※前条（13条）と話題が似通っている。同一場面の別記録か。

（1）地頭 場所、段階、方面。卷五・20条（八四頁）「如心字、各有地頭説。如孟子云、仁、人心也。

仁便是人心、這説心是合理説。如説顔子其心三月不違仁、是心爲主而不違乎理。就地頭看、始得」、卷四一・61条（一〇五八頁）「仁是地頭、克己復禮是工夫、所以到那地頭底」。ここでは、學問修養の立脚点・土台となるものを指すか。下文の「若尋得箇僻靜寺院、做一兩年工夫、須尋得箇地頭、可以自上做將去」と前条の「山間坐一年半歳、是做得多少工夫。只恁地、也立得箇根脚」を参照。

【二二一・15】

朱子「最近の学ぶ者たちを見るに、何もせず、まるで無頼の輩のようだ。人が学問をする際には、『国語』にいう）「火を救い亡を追ふがごとく、猶ほ及ばざるを恐る（火事を消し止めたり、逃亡者を追いかける人のように、ひたすら間に合わないことを恐れる）」というように（切迫した心持ちで）臨まなくてはならない。もし自分が大事にしている光り輝く宝物が他人に奪い去られてしまったら、探し求めて急ぎ追いかけて捕まえ、取り戻さないではいられまい。今の学ぶ者たちは、のんびり悠長に構えていて、意識して何か

に努めるところがない。だから、別れて二年経っても、三年経っても、五年経っても、七年経っても、再び会うと前と何も変わっていないのだ。」〔沈儻〕

某見今之學者皆似箇無所作爲、無圖底人（1）相似。人之爲學、當如救火追亡、猶恐不及（2）。如自家有箇光明寶藏被人奪去、尋求趕捉、必要取得始得（3）。今學者只是悠悠地無所用心、所以兩年三年五年七年相別、及再相見、只是如此。〔儻〕

（1）無圖底人 何の計画も目的も無い輩、無頼の輩。次の卷九五・100条（二四四一頁）によれば、当時の俗語であるという。「縁他不知聖人之可學、飽食終日、無所用心、不成空過。須討箇業次弄、或爲詩、或作文。是他没著渾身處、只得向那裏去、俗語所謂無圖之輩、是也」。また、本条と同じく沈儻の記録である卷二一四・8条（二七五四頁）に「毎日讀書、心全不在上、只是要自說一段文義便了。如做一篇文義相似、心中全無所作爲。恰似一箇無圖之人、飽食終日、無所用心」とある。

（2）救火追亡、猶恐不及 〔国語〕越語下「臣聞從時者、猶救火追亡人也。蹶而趨之、唯恐弗及」。

（3）如自家有箇光明寶藏、必要取得始得 同様の喩えは、卷二二一・7条（二九一九頁）にも見える。

門人たちに言われた。

朱子「君たちはみなそのように悠長に構えていては、ついには何もできない。いま書物を理解しようと一生懸命取り組めば、一日やれば一日やった成果があるが、それでもまだその理解が細切れで、全体を見通せていない恐れがある。それを君たちのようにのんびり構えていては、いったいどうなってしまうことか。光陰過ぎ易し。一日経てば（残された時間は）一日減り、一年経てば一年減り、気がつけば年老いて、ある日突然死がやって来る。そう考えれば、何がおもしろくてそんなふうなのんびり悠長にして来られたのだ。」

〔葉賀孫〕

謂諸生曰「公皆如此悠悠、終不濟事。今朋友著力理會文字、一日有一日工夫、然尚恐其理會得零碎、不見得周匝。若如諸公悠悠、是要如何。光陰易過、一日減一日、一歲無一歲、只見老大、忽然死著。思量來這是甚則劇（1）、恁地悠悠過了。」〔賀孫〕

（1）則劇 おもしろい（こと、もの）。卷一一六・30条（二七九七頁）「子細看來、亦好則劇」。

（12）16条担当 江波戸互

【一一一・17】

朱子「私はふだん諸君の書物の読み方について、とても寛容に相對し、先ずは自分で（好きなように）読ませてきた。先日病を得て、残された年月も長くはないと気づき、大いに恐ろしくなった。諸君がこのようにのにびりとしているようでは、何にもならないで終わってしまうのではないかと。みんなが心を尽くし、道理を徹底的に理解して明らかにしなければならぬのだ。道理というものも、やはり聖賢の言葉にもとづいてその根本の意味を体認するものなのだ。根本の意味が体得できれば、（聖賢が）語っていることがそのまま道理に他ならないのであって、それを一つ一つ理解して十分にはつきりさせ、少しの漏れも滞りもないところまで突き詰めなければならない。常々思うのだが、かつて諸先生は心を尽くし力を尽くして多くの道理を考えたであろうし、また当時それぞれ師から弟子へと親しく伝えられたはずなのに、今見ると各人がそれぞれ自分の（勝手な）説を立てている。そもそも諸先生の考えを体認などしておらず、各人が少しずつ（諸先生の説の一部を）抜き出して、自分の説をでつち上げたに過ぎず、もともと諸先生の心などまったく理解していなかったのだ。私は今（自分の心を理解してほしいというのではなく）ただ諸君が道理をとことんまではつきりと理解し、少しの滞りもないようにしてほしいと願うだけだ。そうなれば、私の心はそのまま諸君の心であり、諸君の心は私の心であって、すべて一つの心なのだ。どうしてある人はここまで語ることができるのか、どうしてある人はここまで語ることができないのか。その違いは何に因るのか。それは自分に大いに欠けたところがあるからに他ならないのだ。」

〔葉賀孫〕

某平日於諸友看文字、相待甚寛、且只令自看。前日因病、覺得無多時月、於是大懼。若諸友都只恁悠悠、

終於無益。只要得大家盡心、看得這道理教分明透徹。所謂道理、也只是將聖賢言語體認本意。得其本意、則所言者便只此道理、一一理會令十分透徹、無些罅（校1）縫蔽塞、方始住。每思以前諸先生盡心盡力、理會許多道理、當時亦各各親近師承、今看來各人自是一說。本來諸先生之意、初不體認得、只各人挑載得些去、自做一家說話、本不會得諸先生之心。某今惟要諸公看得道理分明透徹、無些小蔽塞。某之心即諸公之心、諸公之心即某之心、都只是這箇心（1）。如何有人說到這地頭。又如何有人說不得（校2）這地頭。這是因甚恁地。這須是自家大段欠處。〔賀孫〕

（校1）楠本本は「罅」を「省」に作る。

（校2）正中書局本・朝鮮整版・和刻本・楠本本は「得」を「到」に作る。

（1）某之心即諸公之心、諸公之心即某之心、都只是這箇心 卷二・95条（五〇一頁）「又云、近覺多病、恐來日無多、欲得朋友勇猛近前、也要相傳。某之心、便是公之心一般」、卷六七・163条（一六七八頁）「又云、某病後、自知日月已不多、故欲力勉。諸公不可悠悠。天下只是一箇道理、更無三般兩樣。

若得諸公見得道理透、使諸公之心便是某心、某之心便是諸公之心、見得不差不錯、豈不濟事耶」。

【一一一・18】

先生は門人諸生の取り組みがのんびり悠長であることを激しく叱って言われた。

朱子「いま人が何かをする場合、大して重要ではないことでも心してやらなければうまくいかないもの、どうしてのんびり構えていてうまくやれようか。例えば、字を書くのが上手な人は、いつもそのことが念頭にあるので、見るものすべてが字を書くことの道理となる。賈島は詩作を追究し、ひたすら「推」と「敲」の二字のことだけを考えていたので、驢馬に乗っても手で押したり（推）叩いたり（敲）の仕事をしていた。多くの車馬と人を従えた大尹（韓愈）に出くわしたことに気づかず、不覚にも無礼をはたらいてしまった。そもそもこの「推」と「敲」の二字にどれだけの違いがあるというのか。とは言え、彼はひたすらそのように努力していったので、後に詩を作ると極めて精巧で優れた詩であったのだ。我々の学問は、（詩作に比べ）どれだけ重要なことか。にもかかわらず、まったくもってのんびり悠長に構え、（心がここに）あるのだから無いのだから、緊張感をもって努力することもないようでは、人が大して重要ではないことをするのに及ばない。まったく逆さまだと言わねばならない。諸君、よくよく努めるように。」

〔潘時拳〕

先生痛言諸生工夫悠悠、云「今人做一件事（校1）、沒緊要底事、也著心去做、方始會成、如何悠悠會做得事。且如好寫字底人、念念在此、則所見之物、無非是寫字底道理。又（校2）如賈島（1）學作詩、只思推敲兩字、在驢上坐、把手作推敲勢。大尹（2）出、有許多車馬人從、渠更不見、不覺犯了節。只此推敲二字、計甚利害。他直得恁地用力、所以後來做得詩來極是精高。今吾人學問、是大小大事。却全悠悠若存若亡、更不着緊用力、反不如他人做沒要緊底事、可謂倒置、諸公切宜勉之。」

〔時舉〕

(校1) 正中書局本・朝鮮整版は「事」の字を欠く。

(校2) 楠本本は「又」を「工」に作る。

(1) 賈島 字は浪仙、閩仙。唐代の詩人。『唐詩紀事』卷四〇「賈島赴舉至京。騎驢賦詩、得僧推月下門之句。欲改推作敲。引手作推敲之勢、未決。不覺衝大尹韓愈。乃具言。愈曰、敲字佳矣。遂並轡論詩久之。」

(2) 大尹 京兆尹(京師・長安の長官)であつた韓愈を指す。注(1)所引参照。

【二二・19】

朱子「諸君はただ学ぶ意思があるだけで、まったくもつて散漫、猛然と突き進む気概もない。おそらく日々を空しく過ごして終わってしまうことだろう。火急痛切の気持ちで、期限を厳しく切つて、必死で修養に努め、数ヶ月分の気力を集めて一気に突破し、その後でもむろに内側を涵養するようにしなさい。皆を攻めるには、決死の覚悟で計略を立て、関門を突破しなければならぬ。今の君たちは、皆を攻め落とせず、ただただその周りをうろうろしているにすぎない。道理すらかみ切れず(咀嚼できず)、いつになったら理解が徹底することか。」

〔陳淳〕

諸友只有箇學之意、都散漫(校1)、不恁地勇猛、恐度了日子。須著火急痛切意思、嚴了期限、趨了工夫、

辦（校2）幾箇月日氣力去攻破一過、便就裏面旋旋涵養。如攻寨（校3）、須出萬死一生之計、攻破了關限、始得。而今都打寨未破、只循寨外走。道理都咬不斷、何時得透。〔淳〕

（校1）楠本本は「漫」を「慢」に作る。

（校2）楠本本は「辦」を「作」に作る。

（校3）楠本本は「寨」を「開」に作る。

【一二一・20】

先生が門人諸生に言われた。

朱子「君は『易』にいう「善に遷り、過を改め」たいと思つてゐるができないと云うが、それは自分からそうしようと努めてゐないからにすぎない。そんなふうにあれこれ算段するように考へてゐるだけでは、何も成し遂げられない。人は困難に立ち向かおうとするとき、そう心がすこしでも動いた瞬間にその中に飛び込むしかない。その手前であれこれ思案してゐるようでは、どうにもならない。見たところ、君はここに来て以来、毎日ただ向かい合つて黙つて座つてゐるだけで、一言も発しない。そんなふうにはグズグズして、何ができるといふのか。」

数日後、再び言われた。

朱子「ここにいる諸君の中には、修養のできている者もいれば、欠点のある者もいる。私は一人一人を見て、逐一その欠点を直そうとしている。ところが君だけはただひたすら黙って頷くばかりで、まったく君の心の中が分からない。君のそういうところは大変薄気味悪く卑怯なことで、大きな欠点だ。つよく勇気のある者ならば、善と分かればそのままとことん行ない、かりに間違つたとしても隠したりしないから人の耳目に触れ、みんなが見ていることになる。先日、君は『易』の「風雷益」について講釈していたが、君にはまったく「風」の趣（すばやさ）も「雷」の趣（いさぎよさ）もない。」

〔葉賀孫〕

謂諸生曰「公説欲遷善改過（一）而不能、只是公不自去做工夫。若恁地安安排排、只是做不成。如人要赴水火（二）、這心才（校1）發、便入裏面去。若説道在這裏安排、便只不成。看公來此、逐日只是相對、默坐無言、恁地慢膝膝（校2）、如何做事。」數日後、復云「坐中諸公有會做工夫底、有病痛處底、某一一（校3）都看見、逐一救正他。惟公恁地循循默默、都理會公心下不得、這是幽冥暗弱、這是大病。若是剛勇底人、見得善便（校4）、還他做得透、做不是處、也顯然在人耳目、人皆見之。前日公説風雷益（3）、看公也無些子風意思、也無些子雷意思。」

〔賀孫〕

（校1）楠本本は「才」を「纔」に作る。

（校2）楠本本は「膝膝」を「膝」に作る。

（校3）楠本本は「一一」を「逐一」に作る。

(校4) 底本は「便」を「別」に作る。諸本により改めた。

(1) 遷善改過 『易』益卦・象傳「象曰、風雷益、君子以見善則遷、有過則改」。

(2) 水火 困難や危険なことの喩え。

(3) 風雷益 注(1) 参照。卷七二・94条(二八三五頁)「問、遷善改過。曰、風は一箇急底物、見人之善、己所不及、遷之如風之急。雷は一箇勇決底物、己有過、便斷然改之、如雷之勇、決不容有些子遲緩」。

(17) 20条担当 佐々木 仁美)

【二二一・21】

朱子「私は人相を見るとき、苦悩に満ちてげつそりとした顔付きの人物を好む。とは言え、それはもちろん学問に苦悩した者という意味で、単に苦しげな顔だけして学問をすることを知らないのであれば、何の価値もない。いま遠方よりやってきた学友の中には、学問に意を向けている者もあるが、目の前の君たちは、おおよそありきたりなものに満足してしまい、それ以上進歩を求めることがない。いま更に何かを学ぶことは言うに及ばず、わずか何百何十文字の文章を精密に理解している者すらお目にかからない。」

ある人「昨今の学友たちは、おおむね時文(科挙用の文章)を作ることには忙しく、学問に支障をきたしているのです。」

朱子「そうは言っても、よくできた時文など見たことがない。あるのは剽窃だらけで、でたらめなものばかりだ。もし本当によい時文を作りたのであれば、やはり抛り処を深く広くして、自らに有益なものになければならない。そのようにして時文を作るならば、あるいはもつとよいものになろう。でたらめな時文を読んで、でたらめな試験官に迎合しようとするばかりでは、いい加減で支離滅裂の学問になってしまう。彼らはそういったよい時文を子細に読んだこともないし、時文すら時にいい加減に読んでいる始末だ。今でも覚えているが、私は若いころ試験に臨んだ時、試験官を見下して、こいつにどうして私の考えが理解できようか、と思っていた。今の人はみな試験官に迎合しようと、ますます低俗なものを作ってしまった。かつての知り合いの中で（科挙のための）賦を作った人たちが、どのように読書をしていたかを考えてみると、その人たちはあらゆる書物を読んでいた。今はでたらめな賦を読むばかりで、何の見識もない。もしもう少し見識が高く、もう少し沢山の書物を読み、より高度な議論ができる人であれば、どうしてよい文章を作れないことがあるうか。彼らの理解はその程度に過ぎず、結局お互いに真似し合つて、ひたすらいい加減で支離滅裂な学問をしているのだ。」

先生はしばらくため息をついておられた。

「沈憫」

「某於相法、却愛苦硬（校1）清癯（1）底人、然須是做那苦硬（校1）底事。若只要苦硬（校1）、亦（校2）不知爲學、何貴之有。而今朋友遠處來者、或有意於爲學。眼前朋友大率只是據見定（2）了、更不求進步。而今莫說更做甚工夫、只真箇看得百十字精細底、也不見有。」或曰「今之朋友、大率多爲作時文

妨了工夫。」曰「也不會見做得好底時文、只是剽竊亂道之文而已。若要真箇做時文底、也須深資廣取以自輔益、以之爲時文、莫(3)更好。只是讀得那亂道底時文、求合那亂道底試官、爲苟簡滅裂(校3)底工夫。他亦不會子細讀那好底時文、和時文也有時不子細讀得。某記少年應舉時、嘗下視那試官、說他如何曉得我底意思。今人盡要去求合試官、越做得那物事低了。嘗見已前相識間做賦(4)者、甚麼樣讀書。無書不讀。而今只念那亂道底賦、有甚見識。若見識稍高、讀書稍多、議論高人、豈不更做得好文字出。他見得底只是如此、遂互相做倣(校4)、專爲苟簡滅裂底工夫。」歎息者久之。 [欄]

(校1) 楠本本は、「苦硬」を「若硬」に作る。

(校2) 正中書局本・朝鮮整版は、「亦」を「而」に作る。

(校3) 正中書局本・朝鮮整版・楠本本は、「滅裂」を「蔑裂」に作る。

(校4) 楠本本は、「倣倣」を「倣倣」に作る。

(1) 清瀧 瘦せていることの婉曲表現。

(2) 見定 既に定まった、出来合いの、その時々々の常識的な。卷二二〇・100条(二九一〇頁)の注(1)

参照。

(3) 莫 推測や反問を意味する。くではないだろうか、ひよつとしたらくではないか。

(4) 賦 韻文における文体の一。当時、科擧の選択科目の一つであった。

【一二一・22】

朱子「今の学ぶ者の欠点は、多くは名声を好むことにあるようだ。たとえば読書においても、子細に義理（正しい意味や道理）を探究して徹底的に明らかにしようとはせず、ちよつと目を通せばそれで終わりにし、自分は何々の書を読んだと言うばかりで、まったく我が身に引きつけて考えようもしない。それでいったい何になるというのだ。それは単に名声を得たいがために過ぎないが、実際それが何の名声になるというのだ。結局のところ人に彼は何々の書を読んだと言ってもらえるだけではないか。これはひとり卓氏だけの欠点ではなく、見たところ誰もが皆が同じようだ。そんなことをしていると、一生を無駄にしてしまう。」

〔葉賀孫〕

看來如今學者之病、多是箇好名。且如讀書、却不去子細考究義理、教極分明。只是纔看過便了、只道自家已看得甚麼文字了、都不思量於身上、濟得甚事。這箇只是做名聲、其實又做得甚麼名聲。下梢只得人說他已看得甚文字了。這箇非獨卓丈（一）如此、看來都如此。若恁地、也是枉了一生。〔賀孫〕

（一）卓丈 未詳。

朱子「今の学ぶ者は、だいたい子細に聖賢の言葉の意味を味わうことをせず、みだりに空論を立てたがる。ちようど物を食べて、本当はまだ満腹ではないのに、腹つづみを打って、人に「もう満腹だ」と言うのと同じだ。(そんなことをわざわざ人に言うこと自体)それこそがまだ満腹ではない証拠だ。もし本当に満腹であれば、わざわざ言う必要はない。誰もが何々の銘だの賛だのを作りたがるが、実際のところそれが自分自身の何の役に立つと言うのだ。本当に書物を読み、聖賢の言葉の意味を味わえていないから、今日もこの話、明日もまたこの話をするばかりで、どうして新たな見解が生まれようか。切に戒めなければならない。」

〔潘時拳〕

今學者大抵不會子細玩味得聖賢言意、却要懸空妄立議論。一似喫物事相似、肚裏其實未曾飽、却以手鼓腹、向人說我已飽了。只此乃是未飽、若真箇飽者、却未必說也。人人好做甚銘、做甚贊、於己分上其實何益。既不會實讀(校1)得書、玩味得聖賢言意、則今日所說者是這箇話、明日又只是這箇話、豈得有新見邪。切宜戒之。〔時舉〕

(校1) 底本は「講」に作るが、正中書局本・朝鮮整版・楠本本に拠り「讀」に改めた。

【二二・24】

朱子「いま進歩のない学友たちは、みな（孟子のいう）「彼、此よりも善し（あれはこれよりもましだ）」で事足れりとする気持ちがあり、聖賢になろうという志がない。それ故みな自分に甘く、自分の欠点を厳しく除き去ることができないのだ。だから欠点がいつまでもついて回り、相変わらず物事に流されて、「彼、此より善し」すら覚束ない。」

〔余大雅〕

今朋友之不進者、皆有彼善於此（一）爲足矣之心、而無求爲聖賢之志。故皆有自恕之心、而不能痛去其病。故其病常隨在、依舊逐事物流轉、將求其彼善於此亦不可得矣。〔大雅（校一）〕

（校一）正中書局本・楠本本は、「大雅」を「太雅」に作る。

（一）彼善於此 『孟子』盡心下「孟子曰、春秋無義戰、彼善於此、則有之矣。征者、上伐下也、敵國不相征也」。卷一一八・33条（二八四四頁）「今人爲學、彼善於此、隨分做箇好人、亦自足矣」。

【二二・25】

昌父（趙蕃）「学問修養の努力はどうしても途切れがちになってしまいます。」

朱子「聖賢の教えは、まさにその途切れることを救おうとしたのだ。」

〔陳文蔚〕

昌父言「學者工夫多間斷。」曰「聖賢教人、只是要救一箇間斷。」

「文蔚」

※ 本条と次に掲げる卷五九・171条（二四一六頁）の最後の部分は同一場面の別記録と考えられるが、記録者は同じく陳文蔚である。

「孟子說、先立乎其大者、則其小者弗能奪也。此語最有力、且看他下一箇立字。昔汪尚書問焦先生爲學之道、焦只說一句曰、先立乎其大者。以此觀之、他之學亦自有要。卓然堅起自心、「方子錄云、立者、卓然堅起此心。」便是立、所謂敬以直内也。故孟子又說、學問之道無他、求其放心而已矣。求放心、非是心放出去、又討一箇心去求他。如人睡著覺來、睡是他自睡、覺是他自覺、只是要常惺惺。」趙昌父云「學者只緣斷續處多。」曰「只要學一箇不斷續。」

【一一一・26】

學問修養が途切れてしまうことに触れて言われた。

朱子「古山和尚は「古山の飯を食らい、古山の糞をし、ただ一頭の白い牝牛を見るだけだ」と言った。今の学ぶ者は、彼にも及ばない。」

「陳文蔚」

因說學者工夫間斷、謂「古山和尚自言、喫古山飯、阿古山矢、只是看得一頭白水牯（1）。今之學者却不
如他。」〔文蔚〕

（1）古山和尚、只是看得一頭白水牯。古山和尚は、福州大安禪師。『景德伝灯録』卷九「喫瀧山飯、屙瀧山屎、不學瀧山禪、只看一頭水牯牛」。

【二二一・27】

朱子「初めは非常に集中しているが、だんだんと散漫になり、遂には忘れてしまうようなタイプの学友がいる。そうなってしまうのは、初めにいつまでに何をするとという期限を定めてからやっていかないからだ。」

〔黄土毅〕

有二等朋友、始初甚銳意、漸漸疏散、終至於忘了。如此、是當初不立界分（1）做去。〔土毅〕

（1）不立界分。いつまでに何をするとという期限を定めた計画を立てないこと。卷十・93条（一七四頁）「今之始學者不知此理、初時甚銳、漸漸懶去、終至都不理會了。此只是當初不立程限之故」。

（21）27条担当 中嶋 諒

朱子「いまここに集まっている諸君は、いずれもまだ大きな道理を理解できていない。君たちはいったいとりあえずいい加減に段落を逐って書物を読んでいるだけなのか、それともまっすぐに多くの道理をすべて理解し尽くして、我が身にいささかも欠けたところがないようにしようとしているのか。もしただそんなふうに段落を逐って読んでいるだけで、大きな道理を理解しないならば、今までと変わらず何にもならない。

大きな道理というものは、広々とした基礎となる土地のようなもので、これを開墾できてこそ、その上に色々造ったりしつらえたりして落ち着きどころができるのだ。大きな道理が理解できてはじめて、そこに立脚し落ち着けるところが得られるのだ。もし大きな道理が理解できなければ、ちょうど人に住居が無いのと同じで、どれだけ多くの金をかせいで帰ってきてきてもそれを置くところがない。ましてや、すばらしい財宝であれば、いったいどこに置いておくというのだ。

自分の一身はまるごと多くの道理だ。誰もがみな多くの道理を持つているのであり、『書経』にいう「天が「衷（過不足のない中としての性）」を下し与えて以来あらゆる道理がすべて具わっている。仁義礼智であれ、君臣父子兄弟朋友夫婦（の道理としての五常の道）であれ、自分の一身がすべて担っているのだ。そうした道理を理解し、一つ一つ十分に体認して、少しも欠けたところがないようにしなければならぬ。心を緩やかにし、まっすぐに理解し尽くすようにするのだ。学問の範囲を大きく掲げて、土台を拡げ、足場

を広くして、やがてすみずみにまで到るようにすれば、あらゆるところに落ち着きどころができてくる。日々の生活は、ただこの多くの道理の中で展開しているにすぎないのであって、ご飯を食べるのもその中、床とこに就くのもその中、床を離れるのもその中、衣服を着るのもその中といった具合で、いささかも（道理との）隙間はない。堯舜禹湯であつてもこの道理に他ならないのだ。

もし誰かが花や草を刺繡したとして、その人の刺繡が上手だということを見ていても仕方がない。必ずやその人の針の下ろし方を見なければならぬ。誰かが字を上手に書くとして、その人が上手に書くということを見るのではなく、筆の使い方を見なければならぬのだ。」

〔葉賀孫〕

今來朋友相聚、都未見得大底道理。還且謾（1）恁地逐段看、還要直截盡理會許多道理、教身上沒些子虧欠。若只恁地逐段看、不理會大底道理、依前不濟事。這大底道理、如曠闊地基址、須是開墾得這箇了（校1）、方始架造（2）安排、有頓放處。見得大底道理、方有立脚安頓處。若不見得大底道理、如人無箇居著、趁（3）得百十（4）錢歸來、也無頓放處、況得明珠至寶、安頓在那裏。自家一身都是許多道理。人人有許多道理、蓋自天降衷（5）（校2）、萬理皆具（校3）、仁義禮智、君臣父子兄弟朋友夫婦、自家一身都擔在這裏。須是理會了、體認教一一周足、略欠缺（校4）些子不得。須要緩心、直要理會教盡。須是大作規模、闊開其基、廣闊其地、少間到逐處、即看逐處都有頓放處。日用之間、只在這許多道理裏面轉、喫飯也在上面、上床也在上面、下床也在上面、脫衣服也在上面、更無些子空闕處。堯舜禹湯也只是這道理。如人刺繡花草、不要看他繡得好、須看他下針處。如人寫字好、不要看他寫得好、只看他把筆處。

〔賀孫〕

(校1) 底本及び和刻本・楠本本は「了」を「些」に作るが、正中書局本・朝鮮整版に拠り改めた。

(校2) 楠本本は「衷」を「裏」に作る。

(校3) 正中書局本は「具」を「其」に作る。

(校4) 楠本本は「缺」字を「缺」に作る。

(1) 且謾 その場限りにいい加減に。とりあえず適当に。卷九六・51条(二四七一頁)「若只做得兩三分、說道今且謾恁地做、恁地也得、不恁地也得、便是不誠」。

(2) 架造 (意図的に) 立てる、造る。『語類』ではこのみに見える。

(3) 趁 (金を) かせぐ、儲ける。本卷・30条にも見える。卷一一六・18条(二七九一頁)「如人趁養家一般、一日不去趁、便受飢餓」。

(4) 百十 おおよそ百。多いことをいう。卷十二・26条(二〇一頁)「人常須収斂得身心、使精神常在這裏。似擔百十斤擔相似、須硬着筋骨擔」。

(5) 天降衷 『書經』湯誥「惟皇上帝降衷于下民」。「衷」は過不及のない「中」の意味。

【一一一・29】

朱子「君たち、何かもつと議論することはないのかね。」

座中のある者が答えた。

ある者「ここにいる者たちの学問はいずれも高遠なことを追うばかりで地に足のつかないものですが、最近ようやく先生によつてその蒙を啓かれたところです。ですから急には質問すべきことも見つかりません。将来疑問が生じたならば、お手紙で教えを乞いたいと存じます。」

朱子「それこそ（孟子のいう）「以て来年を待ちて然る後已む（今はとりあえず少しづつ改めて来年には止めたい）」の言い草だ。それは単に己に切実な問題として学問の志を立てることができていないからに他ならない。もし己に切実な問題として志を立てているのならば、眠ってもいられず起き上がつて学問に取り組むはず、（孔子のいう）「発憤しては食も忘れ」「終日食らはず、終夜寝ねず」となつて考えるにちがいない。今の人には二種類の考え方があつた。一つは、とりとめのない高尚そうな議論をするばかりで、少しも自身自身に染みず、その場のおしゃべりにしてしまつてゐる者たち。もう一つは、そうした学問のことは難しいから自分はこのままで満足、他の人にやつてもらおうと言ふ者たちだ。それはちよつど物を売り買ひするのに「批退（購買できる優先権を放棄すること）」を願ひ、他の人が買うのを待つてゐるようなものだ。今の人たちは学問を「批退」する者が多い。」

「廖謙」

先生問「諸公莫更有甚商量。」坐中有云「此中諸公學問皆溺於高遠無根、近來方得先生發明、未遽（校1）有問。將來有所疑、却寫去問。」先生曰「却是以待來年然後已（1）説話、此只是不會切己立志。若果切己立志、睡也不著、起來理會、所以發憤忘食（2）、終日不食、終夜不寢（3）去理會。今人有兩般見識。一

般只是談虛說妙、全不切己、把做一場說話了。又有一般人說此事難理會、只恁地做人自得、讓與他們自理會。如人交易、情願（校2）批退（4）帳、待別人典買。今人情願批退學問底多。」
〔謙〕

（校1）楠本本是「遽」を「據」に作る。

（校2）底本は「情願」に作るが、諸本に抛り「情願」に改めた。

※本条と次に掲げる巻八・51条（一三六頁、記録者は襲蓋卿）は同一場面の別記録か。

今人不肯做工夫。有先覺得難、後遂不肯做。有自知不可爲、公然遜與他人。如退産相似、甘伏批退、自己不願要。

（1）以待來年然後已 『孟子』滕文公下「戴盈之曰、什一、去關市之制征、今茲未能。請輕之、以待來年然後已、何如。孟子曰、今有人日攘其鄰之雞者、或告之曰、是非君子之道。曰、請損之、月攘一雞、以待來年然後已」。

（2）發憤忘食 『論語』述而「葉公問孔子於子路、子路不對。子曰、女奚不曰、其爲人也、發憤忘食、樂以忘憂、不知老之將至云爾」。

（3）終日不食、終夜不寢 『論語』衛靈公「子曰、吾嘗終日不食、終夜不寢、以思、無益、不如學也」。

（4）批退 宋代の制度で、売買の優先権を放棄すること。馮青『朱子語類』詞語研究』（中国社会科学出版社、二〇一四年）一一五頁参照。

朱子「諸君はここ数日書物を読んでいるが、単に文字^{ぶつ}面で理解しているだけで、少しも己に切実なこととして読めていない。そもそも書物を読むのは、文字面を理解しようとするのではなく、自分自身（に与えられた使命として）の性のこととして理解しなければならぬのだ。学ぶ者は、主一でなければならぬ。主一とは心をここに在らしめることで、それができてはじめて学問や修養が可能になるのだ。ちようど人が住む家を見つけてはじめてそこから農工商と様々な仕事に赴くことができるようなものだ。主人に家がなければ、使用人が外でどれだけ稼いで来ても、持って帰ってくるところがない。孟子は「其の放心を求む（放たれてどこかへ行ってしまった心を求める）」と言ったが、この言い方がすでに（求める心と求められる心とに）二つに分かれてしまっている。もしいつでも心がここに在ることを意識していれば、心は自然に放たれることなどないのだ。」

朱子「何事もない時には自分のこの心を意識するようにならなければならない。心を意識しなければ、まるで寝ぼけているのと同じで、何も成し得ない。いま書物を読んでも書かれている道理や意味が理解できないのは、やはり主一の努力が欠けているからに他ならない。」

「潘植」「潘時拳の記録も同じ。」

「諸公數日看文字、但就文字上理會、不會切己。凡看文字、非是要理會文字、正要理會自家性分上事。學者須要主一（一）、主一當要心存這裏、方可做工夫。如人須尋箇屋子住、至於爲農工商賈、方惟（校一）」

其所之。主者無箇屋子、如小人趁(2)得百錢、亦無歸宿。孟子說求其放心、已是兩截(3)。如常知得心在這裏、則心自不放。」又云「無事時須要知得此心、不知此心、恰(校2)似睡困、都不濟事。今看文字、又理會理義不出、亦只緣主一工夫欠闕。」

〔植〕〔時學同。〕

(校1) 楠本本は「惟」を「性」に作る。

(校2) 底本は「恰」を「却」に作るが、諸本に抛り改めた。

(1) 主一 心を一つことに集中させること。卷九六・23条(二四六四頁)「問主一。曰、做這一事、且做一事、做了這一事、却做那一事。今人做這一事未了、又要做那一事、心下千頭萬緒」。北宋の程頤が「敬」を「主一無適」と定義したことを承ける。

(2) 趁 28条注(3) 参照。

(3) 孟子說求其放心、已是兩截 『孟子』告子上「學問之道無他、求其放心而已矣」。卷五九・105条(一四〇一頁)「孟子求放心語已是寬。若居處恭、執事敬二語、更無餘欠」、同・171条(二四一五頁)「求放心、非是心放出去、又討一箇心去求他。如人睡著覺來、睡是他自睡、覺是他自覺、只是要常惺惺」、同・139条(二四〇八頁)「求放心、非以一心求一心、只求底便是已収之心」。

先生がある日、学生たちに言われた。

朱子「私は、学ぶ者たちが經書を読んでも本旨を求めず、とりとめのない空談に耽るのを心配して、それ故先ずは文章の意味に通曉し、書かれている言葉に即して意味を考えるように指導したのだが、その結果、書物の上の言葉をじっと守るばかりで、自分自身のこととして切実に書物を読まない者が往々見受けられるようになってしまった。己に切実なこととして読み、じっくりと心に染みわたるように玩味し、それを一生懸命実践してこそ、(書物を読む)意味があるのだ。」

〔程端蒙〕

先生一日謂諸生曰「某患學者讀書不求經旨、談說空妙、故欲令先通曉文義、就文求意、下梢頭往往又只守定册子上言語、却看得不切己。須是將切己看、玩味入心、力去行之、方有所益。」

〔端蒙〕

【一二一・32】

ある学生が書物を解釈したところ支離滅裂であった。

朱子「もっと自分に切実なこととして読みなさい。」

〔陳文蔚〕

學者說文字或支離泛濫、先生曰「看教切己。」

〔文蔚〕

(28 ～ 32 条担当 垣内 景子)

朱子「学ぶ者が学問をする際に、往々にして疑問を持つべき点に疑問を持たず、疑問を持つべきでない点に疑問を持つ。疑問を持つべき点に疑問を持たないから、目の前の取り組むべき事柄が見逃されがちになる。疑問を持つべきでない点に疑問を持つから、無駄な労力を費やすことになる。金溪（陸九淵の学派）の連中は学問をないがしろにし、心だけを取り上げて弄び、でたらめばかりをやっている。私のところで学ぶ者に細かく経書を読むよう努めさせているのは、正に聖賢の言葉を熟考し、確かなものの在処を探究させようと思つたからだ。それを、こんなふうにあれこれつまらないことに関心を分散させてしまつては、結局何の役にも立ちほしない。私が以前『或問』を書いたのも、学ぶ者に真意を捉まえてもらいたかつたらに他ならない。この書物を読む者は、それによつて、どの説が議論すべきで、どの説が議論に値しないかを弁え、論ずるに値しないものを省略し、真意をさらにはつきりさせればよい。文字面からあれこれ議論を立てるようでは、真意は反つて不明瞭になる。いま諸君は経文の真意を捉えそこねているのみならず、諸家の説すら正しく理解できていない。」

朱子『中庸』に「慎んで思ふ」とあるが、なぜ「深く思ふ」とか、「勤めて思ふ」とは言わなかつたのか。やはり、無駄なことに思慮を費やしてはならず、思慮すべきことを思慮せねばならないからこそ「慎んで思ふ」と言つたのだ。」

「呉必大」

「學者講學、多是不疑其所當疑、而疑其所不當疑。不疑其所當疑、故眼前合理會處多蹉過（1）。疑其所不當疑、故枉費了工夫。金溪之徒（2）不事講學、只將箇心來作弄、胡撞亂撞。此間所以令學者入細觀書做工夫者、正欲其熟考聖賢言語、求箇的確所在。今却考索（校1）得如此支離（校2）、反不濟事。如某向來作或問（3）、蓋欲學者識取正意。觀此書者、當於其中見得此是當辨、此不足辨、刪其不足辨者、令正意愈明白可也。若更去外面生出許多議論、則正意反不明矣。今非特不見經文正意、只諸家之說、亦看他正意未著。」又曰「中庸言慎思（4）、何故不言深思。又不言勤思（校3）。蓋不可枉費心去思之、須是思其所當思者、故曰慎思也。」

「必大」

（校1）正中書局本・朝鮮整版・和刻本・楠本本は「考索」を「攷索」に作る。

（校2）正中書局本・和刻本・楠本本は「支離」を「支離」に作る。

（校3）楠本本は「勤思」を「勤思」に作る。

（1）蹉過 目の前の機会を逃してしまふ、時機を逸してしまふ、見過ごしてしまふ。卷八・21条（一二三二頁）「學者做工夫、莫說道是要待一箇頓段大項目工夫後方做得、即今逐些零碎積累將去。才等待大項目後方做、即今便蹉過了」、『文集』卷五八「答陳廉夫」「若即今全不下手、必待他日遠求師友然後用力、則目下蹉過却合做底親切功夫、虛度了難得底少壯時節」、同卷六四「答或人」「知如此是病、即便不如此是藥。若更問何由得如此、則是騎驢覓驢、只成一場閑說話矣。誠敬固非窮理不能得。然一向如此牽連

説過、前頭却恐蹉過脚下工夫也」。

(2) 金溪之徒 「金溪」は、江南西路（現在の江西省）撫州に属する県。朱熹の論敵である陸九淵の出身地であり本拠地であることから、朱熹は陸九淵のことを「金溪」、その学問のことを「金溪之學」、その学を奉じる者を「金溪之徒」と呼ぶことがある。

(3) 或問 門人らが『四書或問』を読むことにより反つて疑問を増したことは、以下の諸条を参照。卷十四・37条（二五五頁）「某所成章句或問之書、已是傷多了。當初只怕人曉不得、故説許多。今人看、反曉不得」、同・49条（二五八頁）「某作或問、恐人有疑、所以設此、要他通曉。而今學者未有疑、却反被這箇生出疑」。

(4) 慎思 『中庸』（章句二〇章）「博學之、審問之。慎思之、明辨之、篤行之」。

【二二一・34】

ある人「以前、読書は「涵泳」しなければならず、隅々にまで行き渡るようにせねばならないと教えていただきました。そこで『孟子』をじっくり読んでみましたが、その千言万語はすべて心を論じたものに他ならないと気づきました。『孟子』全七篇をそのように読むことは、「涵泳」の修養と言えまじょうか。」

朱子「私はこちら（長沙）の人の読書のしかたがとても大雑把なのを見て、そこで読書は「涵泳」しなければならず、子細に読んでじっくり味わい深く考え、心中に得るところがあるように促したのだ。それな

に君は、（私の話に）別の考えをくつつけて無理やり理屈をつけようとしている。読書はそういうものではない。」

ある人「先生の「涵泳」の御説は、つまり杜元凱（杜預）の所謂「優にして之を游す」のころですね。」

朱子「もちろんそうだが、そんなふうに解説する必要はない。私の言う「涵泳」というのは、細かく本を読むことの別名に過ぎない。人に話をするのは実に難しい。私はただ「涵泳」と言っただけなのに、一人は無理に理屈をつけようとするし、一人は強いて解釈を付そうとする。これは、ひとこと言うことに別の解釈が生まれるというやつで、どんどん支離滅裂になり、どうでもいい無駄話になって、やがてそれを繰り返しているうちに添えられる言葉が増えれば増えるほど本旨から遠くなっていく。そんなことをして、いったいどうしようと言うのか。そんなふうに読書したり、人の話を聞いたりしているようでは、自身の修養にはならず、まったく手の着けようもない。学問は空談にすぎないと人に言われてしまうのも当然だ。こちらの人の質問は概ねこのようなものばかりだ。取り組むべきことに取り組まず、取り組むべきでないことにごちゃごちゃと言葉を並べ立てるばかりで、言葉に何の深みもない。」

〔襲蓋卿〕

或問「向蒙見教、讀書須要涵泳、須要浹洽。因看孟子千言萬語、只是論心。七篇之書如此看、是涵泳工夫否。」曰「某爲見此中人（1）讀書大段鹵莽（2）、所以說讀書須當涵泳、只要子細看玩尋繹、令胸中有所得爾。如吾友所說、又襯貼（校1）（3）一件意思、硬要差排（4）。看書豈是如此。」或曰「先生涵泳之說、乃杜元凱優而游之（校2）（5）之意。」曰「固是如此、亦不用如此解說。所謂涵泳者、只是子細讀書之異

名。與人說話便是難。某只是說一箇涵泳、一人硬來安排、一人硬來解說。此是隨語生解（6）、支離延蔓、閑說閑講、少間展轉只是添得多、說得遠、却要做得甚（7）。若是如此讀書、如此聽人說話、全不是自做工夫、全無巴鼻。可知（8）是使人說學是空談。此中人所問、大率如此。好理會處不理會、不當理會處却支離去說、說得全無意思。」〔蓋卿（校3）〕

（校1）正中書局本・朝鮮整版・楠本本は「襯貼」を「襯貼」に作る。

（校2）正中書局本・朝鮮整版・和刻本・楠本本は「優而游之」を「優而柔之」に作る。注（5）参照。

（校3）底本は記録者を「蓋」に作るが、諸本に拠り「蓋卿」に改めた。

※卷一六・15条（二七九〇頁）に襲蓋卿によるほぼ同文の記録がある。こちらの記録は冒頭「或問」の前に「甲寅八月三日、蓋卿以書見先生於長沙郡齋、請隨諸生遇晚聽講、是晚請教者七十餘人」とある。

（1）此中人 「此中」はここ、こちら。卷一六・15条の記録によると、この場面は紹熙五年（一一九四）八月三日、朱熹が知潭州として赴任中に長沙の郡齋においてなされたものであり、従って「此中人」は長沙の為学者らを指す。

（2）鹵莽 いい加減である、粗雑である。卷十三・145条（二四五頁）「語或人曰、公且道不去讀書、專去讀些時文、下稍是要做甚麼人。赴試屢試不得、到老只恁地衰颯了、沈浮鄉曲間。若因時文做得一箇官、只是恁地鹵莽、都不說著要爲國民興利除害、盡心奉職」。

（3）襯貼 『語類』では「襯帖」「帖襯」に作るケースもある。ぴったりとくつつくこと、べったり張

り付くこと。卷五二・71条（一二四五頁）「孟子養氣一章……曰、道義是虛底物、本自孤單。得這氣帖起來、便自張主無所不達。如今人非不爲善、亦有合於道義者。若無此氣、便只是一箇衰底人。李先生曰、配、是襯帖起來。又曰、若說道襯帖、却是兩物。氣與道義、只是一滾發出來、思之。一滾發出來、說得道理好。襯帖字、說配字極親切」、同・88条（一二五〇頁）「曰、道義在人。須是將浩然之氣襯貼起、則道義自然張主、所謂配合而助之者、乃是貼起來也」。

(4) 差排　こじつける、理屈をつける。卷六〇・125条（一四四六頁）「利善、若只是利善、則易理會。今人所爲處都是利、只管硬差排道是善。今人直是差處多」。

(5) 杜元凱優而游之　「杜元凱」は、西晋の政治家、学者の杜預（二二二～二八四）のこと。字は元凱。『春秋左氏伝』を愛好し、自ら「左伝癖」があると称した（『晋書』卷三四）。著書に『春秋経伝集解』がある。「優而游之」は、『春秋経伝集解』卷一・「春秋左氏伝序」に「優而柔之、使自求之。鑿而飫之、使自趨之。若江海之浸、膏澤之潤、渙然冰釋、怡然理順、然後爲得也」とある。「優而柔之、使自求之」は、もと『大戴礼記』子張問入官の語。卷一一六・15条の記録では「優而游之」を「優而柔之」に作る。

(6) 隨語生解　字面ごとに解釈を考え出し、いたずらに言葉を生み出していくこと。言葉に振り回されること。

(7) 却要做甚　卷一一六・15条の記録ではこの四字がない。

(8) 可知　張相『詩詞曲語辭匯釈』（中華書局、一九六二、八三頁）卷一「可知」の項に「可知、猶云當然也、難怪也」とあり、「当然くだ」「ゝなのも無理はない」の意。卷二一・43条（五一五頁）「又問、

知和而和是如何。曰、知和而和、却是一向去求和、便是離了禮。且如端坐不如箕踞、徐行後長者不如疾行先長者、到這裏更有甚禮。可知是不可行也」。

【二二・35】

ある人が〔「論語」の〕「居処には恭、事を執りて敬、人に与まじはりて忠」について質問した。

ある人「内面からそうしていくからこそ、外面がこんなふうを整うのでしょうか。」

朱子「君の本の読み方にはそういう欠点が多い。この言葉のどこから内面からやっていくなどという話が出て来るのかね。ただ「居処」の時には「恭」、「事を執」れば「敬」、「人と与」わる時には「忠」というだけのことで、それが「夷狄に之ゆくと雖も、棄つべからず」だということを言っているに過ぎないのだ。だいたい読書というのは、本文に即して素直に読むべきで、そんなふうにあれこれ余計な解釈を増やして、それに足をとられてぐずぐずしているようでは、結局は何にもならない。聖賢の言葉はどれ一つとっても直截でないものはない。まるで鋭利な刃物で切り出してきたかのようにだ。孔子の言葉は渾然としていて温かみがあるものだが、それでもこの言葉はすばりと言い切っている。君はこの一句を解釈するのにさらに数十字を費やして包み込もうとするが、もしそうなら、聖賢は最初からなぜ一句ごとにくつかの字を増して、意味をはっきりさせなかったのか。濂溪（周惇頤）や二程（程顥、程頤）、横渠（張載）らの言葉はすべてずばりとして力がこもっており、一語一句、かくも重厚である。他でもない、君の読み方がそんなふうには散

漫で弱々しいのは、君の心がきちんと整っていないからだ。心がきちんとしていないから、気持ちが緩み、まったく意識を一つ事に集中できず、話がよそへ行ってしまうのだ。心をきちんと整え、気持ちを引き締め、言うことにも力がこもるようになり、どこから見てもきっぱりとけじめができるようにならなければいけない。いまそんなふうにした話があちらこちらへ行くようでは、まったく解釈としての体をなさない。こうした欠点の根は、心がきちんと整っていないことにあるのだ。」

〔沈憫〕

或問（校1）居處恭、執事敬、與人忠（1）、云「須是從裏面做出來、方得他外面如此。」曰「公讀書便是多有此病。這裏面（校2）又那得箇裏面做出來底說話來。只是居處時使用恭、執事使用敬、與人時使用忠、雖之夷狄、不可棄也。不過只是如此說。大凡看書、須只就他本文看教直截、切忌如此支離蔓衍、拖脚拖尾（2）、不濟得事。聖賢說話、那一句不直截。如利刃削成相似。是以孔子之語、渾然濃厚、然他那句話更是斬截。若如公說一句、更用數十字去包他、則聖賢何不逐句上更添幾字、教他分曉。只看濂溪二程橫渠們（校3）說話、無不斬截有力、語句自是恁地重。無他、所以看得如此寬緩無力者、只是心念不整肅、所以如此。緣心念不整肅、所以意思寬緩、都湊泊（3）他那意思不著、說從別處去（4）。須是整肅心念、看教他意思嚴緊、說出來有力、四方八面截然有界限、始得。如今說得如此支蔓、都不成箇物事。其病只在心念不整肅上。」

〔憫〕

（校1）正中書局本・朝鮮整版・和刻本・楠本本は「或問」を「或解」に作る。

（校2）正中書局本・朝鮮整版は「面」の字を欠く。

(校3) 正中書局本・朝鮮整版・和刻本は「們」を「門」に作る。

(1) 居處恭、執事敬、與人忠 『論語』子路篇「樊遲問仁。子曰、居處恭、執事敬、與人忠。雖之夷狄、不可棄也」。

(2) 拖脚拖尾 徐時儀『朱子語類』詞彙研究(上海古籍出版社、二〇一三)は該語を、『語類』や禪籍などで用いられる「拖泥帶水」「拖泥涉水」「帶水拖泥」「惹泥帶水」「和泥合水」と同一系列の語とし、「有」粘連拖帶「義」と解説する。同書三二七頁。

(3) 湊泊 一箇所に集まつて付着すること、定着すること。卷四・41条(六五頁)「人之所以生、理與氣合而已。天理固浩浩不窮、然非是氣、則雖有是理而無所湊泊」、卷十二・84条(二二〇頁)「根本不立、故其他零碎工夫無湊泊處」。

(4) 說從別處去 「從去」の句形について、三浦國雄『朱子語類』抄(講談社學術文庫、二〇〇八)は「動作の起点ではなく動作のめざす方向を表す」(三〇八頁)と解説する。卷九四・16条(二三六七頁)「分陰分陽、兩儀立焉、兩儀是天地、與畫卦兩儀意思又別。動靜如晝夜、陰陽如東西南北、分從四方去」。

(33) 35条担当 原信太郎 アレシヤンドレ